

大館市史編さん調査資料 第15集

大 館 市 山 館

上ノ山遺跡
発掘調査報告書

1975・3

大館市史編さん委員会

5

目次

1 遺跡の位置と遺跡 1

2 遺跡について 1

3 1号竪穴住居跡 2

4 2号竪穴住居跡 3

5 3号竪穴住居跡 4

6 4号竪穴住居跡 5

7 5号竪穴住居跡 7

8 フラスコ状ピット 7

9 不整形内も竪穴・土壇跡 7

10 遺物について 8

11 2号竪穴住居跡遺積土中出土遺物 10

12 土器破片 10

13 埴輪土器 13

14 石 器 21

15 5号竪穴住居跡床面上出土埴輪土器 25

16 4号竪穴住居跡遺積土中出土遺物 24

17 土器破片 24

18 埴輪土器 26

19 石 器 26

20 5号竪穴住居跡床面上出土石器 28

21 フラスコ状ピット中出土遺物 29

22 不整形内も竪穴・土壇跡出土遺物 29

23 埴輪土器遺積土中出土遺物 30

24 埴輪土器 30

25 石 器 30

26 考 察 33

27 土器について 33

28 遺跡について 34

29 附 録 35

30 参 照 35

大 館 市 山 館

上ノ山遺跡

発掘調査報告書

言 明

秋田考古学協会員 奥山 潤

秋田考古学協会員 板橋 範芳

1975・3

例 言

- 1 この報告書は、大館市史編さん委員会
が実施した、市内山館字上ノ山所存の一
遺跡に関する報告書である。
- 2 この調査の法による発掘責任者は市長
石川芳男であり、発掘調査担当者は、奥
山 潤である。
- 3 この調査には担当者の指示により、板
橋範芳があたり、報告書作成にも板橋が
あたった。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 遺跡について	1
A 1号竪穴住居跡	5
B 2号竪穴住居跡	5
C 3号竪穴住居跡	6
D 4号竪穴住居跡	7
E 5号竪穴住居跡	7
F フラスコ状ピット	7
G 不整楕円形竪穴・土塚墓	7
III 遺物について	9
A 2号竪穴住居跡埋積土中出土遺物	10
○土器破片	10
○復原土器	18
○石 器	21
B 2号竪穴住居跡床面上出土復原土器	23
C 4号竪穴住居跡埋積土中出土遺物	24
○土器破片	24
○復原土器	26
○石 器	26
D 5号竪穴住居跡床面上出土石器	28
E フラスコ状ピット内出土遺物	28
F 不整楕円形竪穴床面出土土器	29
G 袋状土塚墓内出土遺物	30
○復原土器	30
○石 器	30
IV 考 察	33
A 土器について	33
B 遺構について	34
V 総 括	36
謝 辞	36

図・図版目次

Fig

Fig 1	遺跡位置図	2
Fig 2	遺跡付近図	3
Fig 3	発掘全体図	4
Fig 4	竪穴群実測図	8
Fig 5	不整楕円形竪穴・土塚墓実測図	8
Fig 6	2号竪穴埋積土中出土土器	13
Fig 7	2号竪穴埋積土中出土土器	16
Fig 8	2号竪穴埋積土中出土土器	17
Fig 9	2号竪穴埋積土中出土復原土器	19
Fig 10	2号竪穴床面上・4号竪穴埋積土中 不整楕円形竪穴出土復原土器	20
Fig 11	2号竪穴埋積土中出土石器	21
Fig 12	2号竪穴埋積土中出土石器	22
Fig 13	4号竪穴埋積土中出土土器	25
Fig 14	4号竪穴埋積土中出土石器	27
Fig 15	5号竪穴床面上出土石器	27
Fig 16	フラスコ状ヒット内出土遺物	29
Fig 17	土塚墓内出土復原土器	31
Fig 18	土塚墓内出土石器	32

PL

PL 1	遺跡遠望	38
PL 2	竪穴群全体写真	38
PL 3〔1〕	2号竪穴埋積状態	39
PL 3〔2〕	2号竪穴埋積土層状態	39
PL 3〔3〕	2号竪穴完掘状態	40
PL 3〔4〕	2号竪穴袋状ビット	40
PL 4〔1〕	3・4号竪穴埋積状態	41
PL 4〔2〕	3・4号竪穴完掘状態	41
PL 5〔1〕	5号竪穴切り込み埋積土状態	42
PL 5〔2〕	5号竪穴完掘状態	42
PL 6	1・4・5号竪穴切り合い部分	43
PL 7	フラスコ状ビット写真	43
PL 8〔1〕	不整楕円形竪穴、土塚墓発掘状態	44
PL 8〔2〕	土塚墓細部写真	44
PL 8〔3〕	不整楕円形竪穴・土塚墓完掘状態	45
PL 8〔4〕	不整楕円形床面上出土土器	45
PL 9〔1〕	2号竪穴埋積土中出土土器	46
PL 9〔2〕	2号竪穴埋積土中出土土器	47
PL 10	2号竪穴埋積土中出土復原土器	48
PL 11	2号竪穴床面上・4号竪穴埋積土中。 不整楕円形竪穴床面上出土復原土器	49
PL 12	2号竪穴埋積土中出土石器	50
PL 13	4号竪穴埋積土中出土土器	51
PL 14	4号竪穴埋積土中出土石器	52
PL 15	5号竪穴床面上出土石器	52
PL 16	フラスコ状ビット内出土遺物	53
PL 17	土塚墓内出土復原土器	54
PL 18	土塚墓内出土石器	55
PL 19	台地下水田用水路傍発見石器	55

I 遺跡の位置と環境 (Fig 1・2)

遺跡は、八幡平に源を発する米代川が、鹿角盆地を経て、大館盆地に入る侵入部、十和田火山源の火砕流と、その第二次堆積物（シラス）で構成される平坦な河岸段丘上に位置し、標高約80m、下位水田面からの比高約15mである。

地番は、秋田県大館市山館字上ノ山56番地。

大館市街地より、国道103号線を南へ約5km、米代川にかかる扇田大橋の手前を東に折れると山館部落がある。今その橋を渡り、北秋田郡比内町扇田から鹿角市へ向うと、北方米代川北岸に標高60~80mほどの河岸段丘が、鹿角市へいたる約12kmにわたって、連々と続いているのを見ることができる。この河岸段丘上には、数多くの遺物散布地が点在するが、東北縦貫自動車道にかかわる、米代川北線道路敷設工事により、多くは破壊を受け消滅もしくは消滅の危機に瀕している。山館遺跡は、その河岸段丘の最西端部にあたる。

米代川の豊富な水量は、そのままその流域の自然をおおいに潤し、米代川をうめつくすようにのぼったであろうサケマスや淡水魚貝の漁撈、背後に連なる奥羽丘陵での動物の狩猟、植物食物の採集、等による豊富な産物をかてとするきわめて生活条件の良い場所に遺跡は位置している。

米代川及び米代川に合流する多くの支流、特に米代川の北側のそれらの流域には、円筒土器文化遺跡の密度が濃い。

II 遺跡について (Fig 3)

過去において、遺跡ののる台地上の表土を、台地先端の低地部へ客土したため、表土は地山であるシラス上約25cm前後という、円筒土器文化遺跡としては、比較的浅い条件で調査を進めることができた。この客土作業の過程で相当数の遺物が出土したことが伝えられている。

昭和28年の上川沿村勢要覧によると、「昭和5年頃本村山館にある村社八幡神社所在地字館の上南側崖下の畑地から各種多数の土器類が発掘された。云々」とあり、秋田県遺跡地名表に、縄文文化包含地・50番・大館市山館開墾地・前期・土器（円筒下層a・b・c）とあるのは、これら諸々の発見された遺物によるものであろう。

今次発掘調査の地区は、八幡神社ののる台地の南にある、いまひとつの台地上であり (Fig 2)、上川沿村勢要覧による、土器出土地点とは若干異なるようであるが、学術調査の手が加えられたの

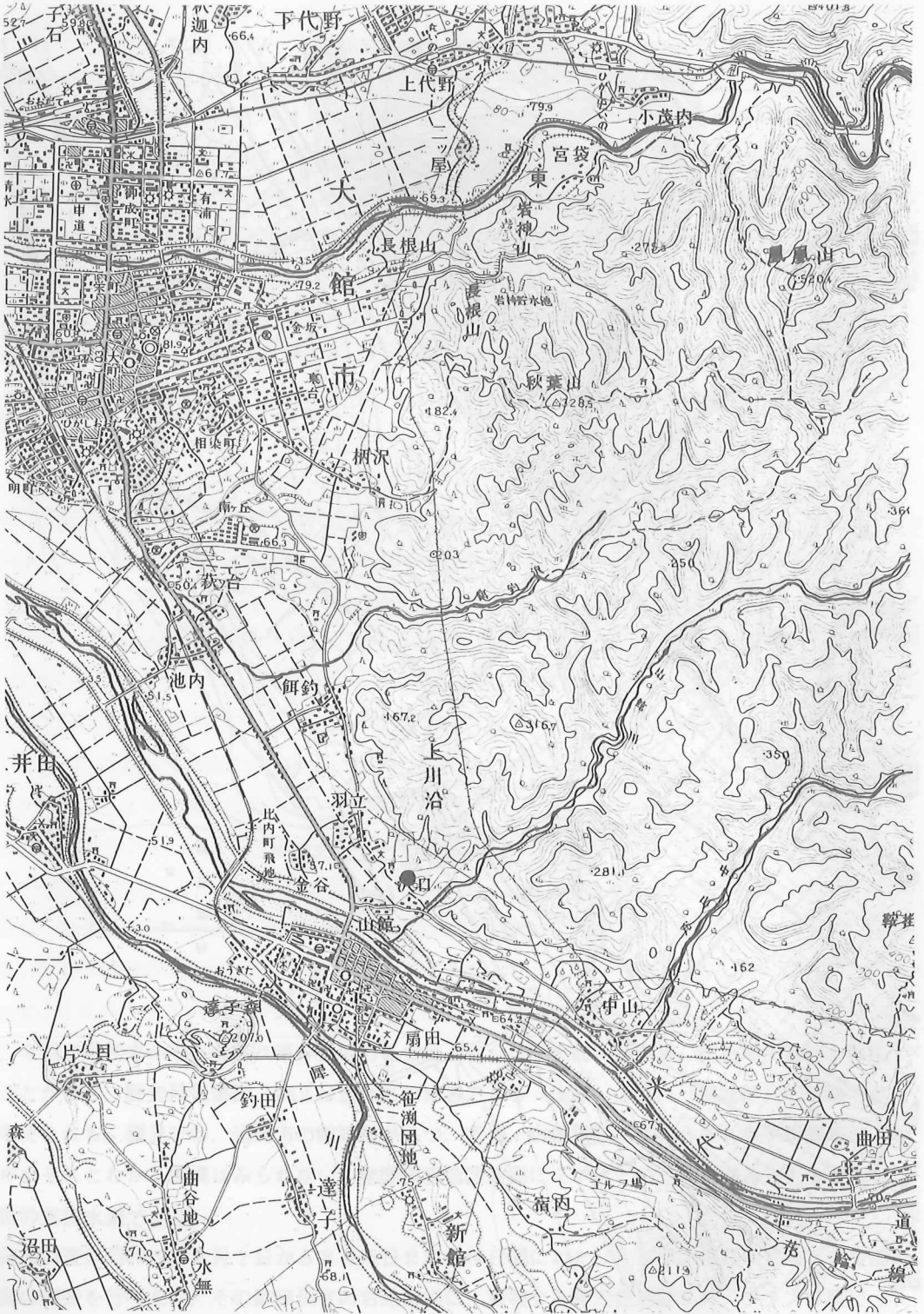


Fig 1 遺跡位置図「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭50総複・第79号」

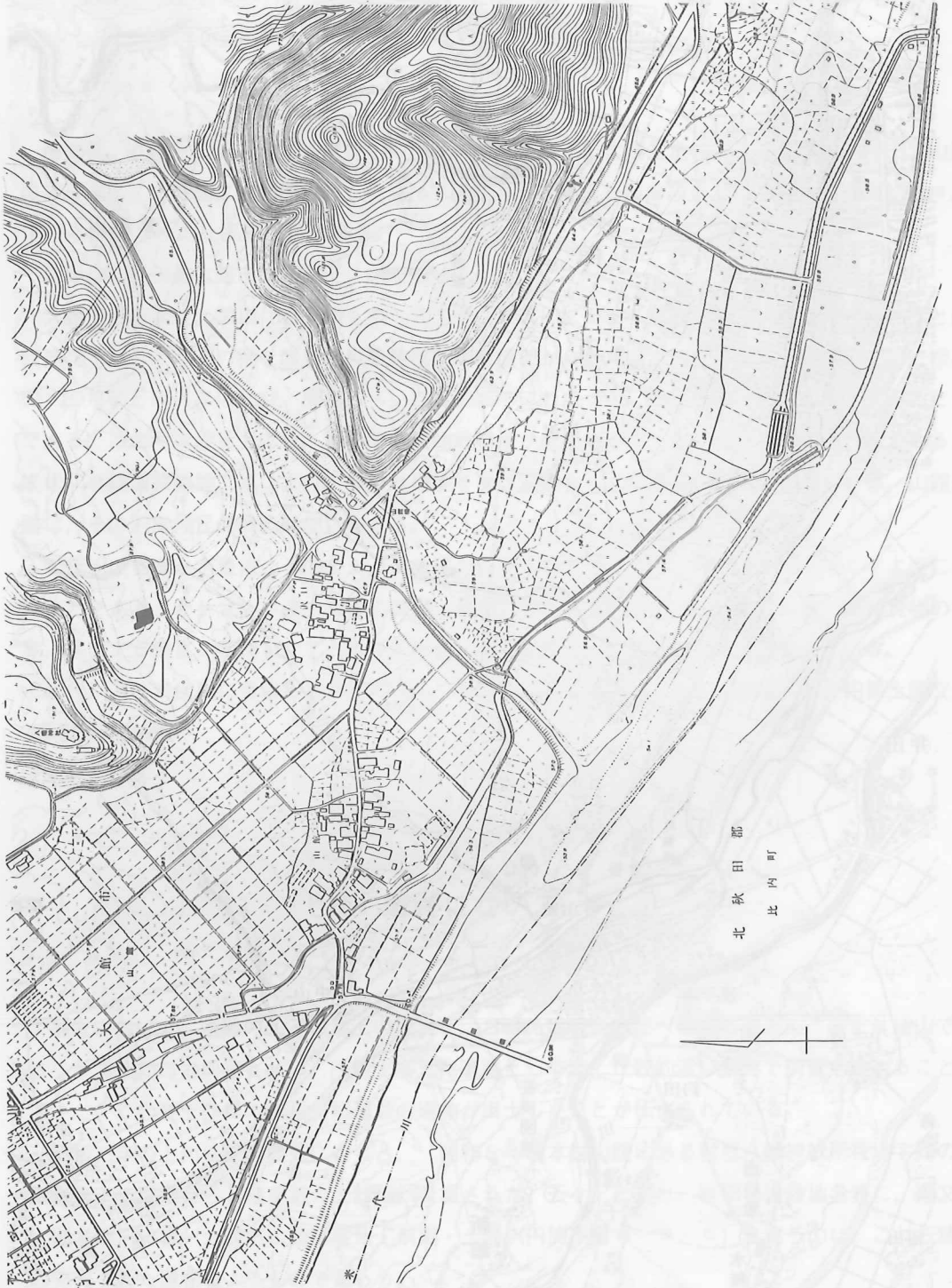


Fig 2 遺跡位置図

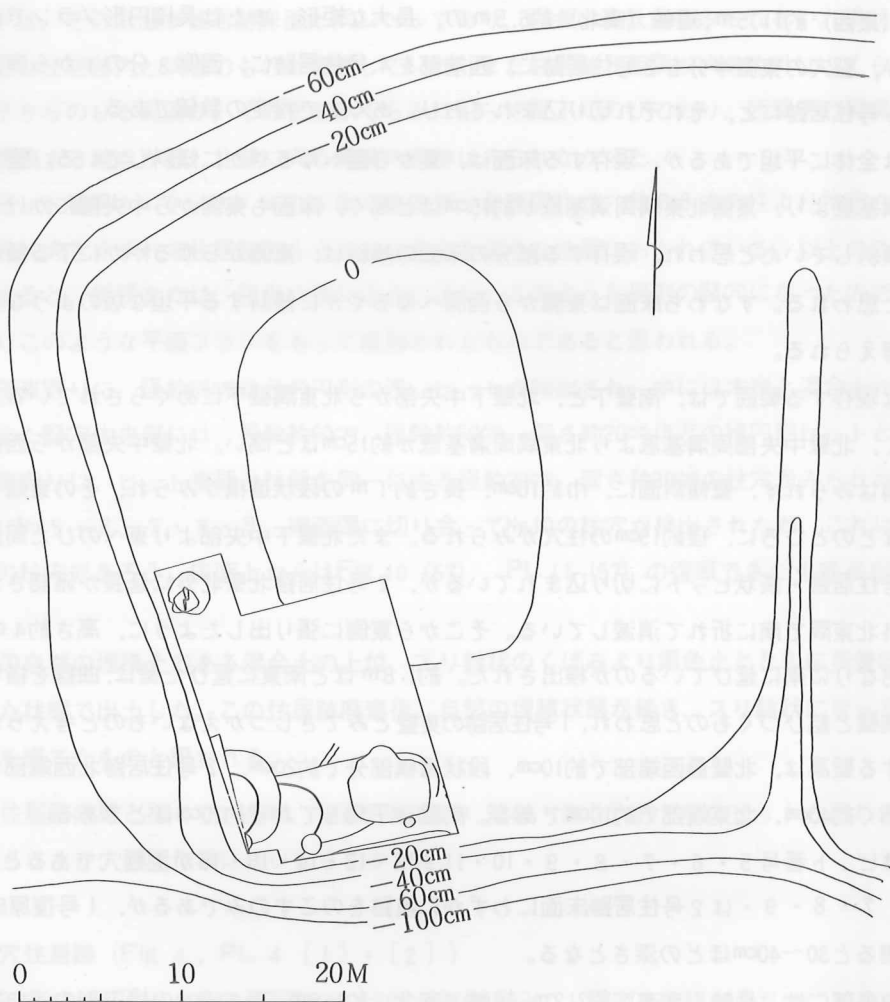


Fig 3 発掘全体図(1/5大)

は、今回が最初である。なお八幡神社ののる台地上からは、土師・須恵等、歴史時代遺物を採集することができ、歴史時代遺跡、例えば当地区の地名である「山館」より、「館城跡」的遺跡の存在も考えられる。現況では、当地方の館城跡がもつ、空掘・台地周囲にめぐらされる平坦面等の、外見からそれとわかる遺構はみられない。発掘調査地区東側に2mほどの空掘りがみられるがこれは後世の集排水溝である。

発掘調査は昭和49年8月2日から8月15日までの14日間にわたり、東西にのびる台地の中央部、南側の調査を行ったが、その結果現在の台地縁沿に、重複する竪穴住居跡5戸、フラスコ状ビット1、袋状土坑墓1、調査はできず確認するだけで終わったが、後世の植林作業のため削り取られて半分ほど消滅してしまったとおもわれる竪穴1戸、およびビット2を検出した。

A 1号竪穴住居跡 (Fig 4, PL 2)

長軸 (東西) 約11.5m, 短軸 (南北) 約6.5mの, 長大な矩形, または長楕円形プランであると思われるが, 竪穴の東側半分を2号住居跡に, 西端部を4号住居跡に, 西側3分の1から南西端部にかけて5号住居跡にと, それぞれ切り込まれており, あくまで推定の数値である。

床面は全体に平坦であるが, 現存する床面は, 東から西へゆるやかに傾斜している。竪穴北壁中央部周溝基底より, 東側北東隅周溝基底が約15cmほど高く, 床面も東側から中央部にかけて, ゆるやかに傾斜していたと思われ, 現存する部分の床面の傾斜は, 東側からゆるやかに下る傾斜の延長であると思われる。すなわち床面は東側から西側へゆるやかに傾斜する平坦な坂のような状態であったと考えられる。

周溝は現存する範囲では, 南壁下と, 北壁下中央部から北東隅壁下にめぐらされている。前述したごとく, 北壁中央部周溝基底より北東隅周溝基底が約15cmほど高い。北壁中央部から西側にかけては周溝はみられず, 壁傾斜面に, 巾約10cm, 長さ約1mの段状遺構がみられ, その東端と西側4分の1ほどのところに, 径約15cmの柱穴がみられる。また北壁下中央部より東へのびた周溝は, 途中を2号住居跡・袋状ピットに切り込まれているが, 2号住居跡北壁北外に延長が確認され, 2号住居跡外北東隅で南に折れて消滅している。そこから東側に張り出したように, 高さ約4cmほどの壁が, 弓なりに南に延びているのが検出された。約1.8mほど南東に延びた壁は, 曲線を描いて南に折れ, 南壁と結びつくものと思われ, 1号住居跡の東壁とみてさしつかえないものと考えられる。

現存する壁高は, 北壁最西端部で約10cm, 段状遺構部分で約20cm, 2号住居跡北西端部付近で最も高く約40cm, 北東端部で約10cmである。南壁は平均しており約20cmほどである。

柱穴はピット番号5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16が主柱穴であると思われ, 5・6・7・8・9は2号住居跡床面にわずかに痕跡をのこすのみであるが, 1号復原床面レベルから測ると30~40cmほどの深さとなる。

竪穴中央部には, 長軸 (東西) 約2.2m, 短軸 (南北) 約1.6m, 深さ10cmの楕円形の浅い掘り込みがあり, 木炭が黒色土とともに埋積していた。底面に特に火を受けた痕跡はみられなかったが, 住居跡中央部にあり, 木炭をかなり多量に埋積していることより, 1号住居跡の炉跡であろうと思われる。

当住居跡南側約1mほど離れて, 並行するような長い掘り込み跡を検出したが, その南側が植林事業のため削り取られ低い段になっており, 土砂排土の関係で確認作業はできなかった。1号住居跡同様の長大な竪穴住居跡であろうと思われる。(PL 3〔3〕・写真上部)

B 2号竪穴住居跡 (Fig 4, PL 3〔1〕・〔2〕・〔3〕・〔4〕)

長軸 (東西) 約5.2m, 短軸 (南北) 約4.2mの, 隅丸矩形の竪穴であるが, 北西部で大きく外にふくらんでいる。1号竪穴住居跡東側部分を切り込んでつくられており, 壁の高さは, 東・南・北壁では約40cm, 西壁現高約10cmを測る。壁下には周溝をめぐらしているが, 北壁中央部に, 径約1.8m

mの半円形の袋状ピットがあり、そこには周溝はみられない。

袋状ピットは、その底面が住居跡床面と同レベルであり、両者に高低差はみられない。袋状ピット内の埋積土は住居跡内と同様のものが埋積していた。また住居跡北西隅が大きく外にふくらむ箇所も、西壁下からのびる周溝が、そのままふくらみに沿って壁下にのびており、西壁下の周溝が一担隅丸状に湾曲する地点から、北壁に向う周溝の痕跡はみられなかった。

主柱穴はピット番号1・2・3・4の4本であるが、北西隅柱が、他の3本の柱より推定される位置より、外へ大きくずれて住居跡のふくらみに合せるような位置におかれている。以上のことを総合して考えると、拡張または、後世の掘り込みにより、このような異形の竪穴になったのではなく、当初よりこのような平面プランをもって成形されたものであると思われる。

竪穴中央部東寄りに、径約65cmほどの円形の浅いピットが検出され、中には木炭と混合土が埋積していた。また竪穴中央部には、長軸約60cm、短軸約50cm、深さ約20cmほどの楕円形ピットと、そのピット内東寄りに、ピット東壁と柱壁を同一にする径約20cm、深さ約30cmの柱穴がみられた。

竪穴床面にNo.5・6・7・8・9、南西隅に切り合ってNo.10の柱穴が検出されたが、これは1号竪穴住居跡の柱穴であろう。床面上からはFig 10 (57)、PL 11 (57)の復原できた土器が出土した。

住居跡内の自然の埋積土である混合土の上位、スリ鉢状のくぼみより黒色土とともに多量の土器が放棄された状態で出土した。この住居跡廃棄後、自然の埋積状態が続き、スリ鉢状になつたくぼみに、土器を棄てたものと思われる。

2号竪穴住居跡南壁と接して、長軸(東西)約1.2m、短軸(南北)約1mのピットと思われる掘り込みがみられたが、確認作業にはいたらなかった。

C 3号竪穴住居跡 (Fig 4, PL 4 [1]・[2])

調査区最西端に検出された竪穴住居跡で、全体の東側3分の1程度を確認しただけにとどまった。西側は後世の開墾のため削り取られ消滅している。当竪穴住居跡を拡張したように、4号竪穴住居跡が設けられているために、全体の壁面は破壊され、壁下にあったと思われる周溝が、わずかに住居跡の痕跡をとどめているにすぎない。

3分の1程であるが現存する周溝から計測すると、径約4mほどの円形プランの竪穴住居跡で、柱穴は周溝と重複して8本検出された。住居跡内床面にも1つの柱穴が検出されたが、全体を把握できないので、2号竪穴住居跡同様の4本主柱のうちの1柱であるのか、4号竪穴住居跡に関係するものであるのか確証を得ない。

前述したごとく、4号竪穴住居跡がのちに覆うごとく設けられたので、3号竪穴住居跡に関係あると見られる遺物は検出できなかった。

D 4号竪穴住居跡 (Fig 4, PL 4〔1〕・〔2〕)

1号竪穴住居跡を切り込み、3号竪穴住居跡を一回り大きく拡張したようなプランで築造されている。

3号竪穴住居跡同様、全体の東側3分の1ほどの検出で、西側はやはり後世の開墾で破壊されている。

現存している状態から計測してみると、径約7mほどの円形プランであると思われ、壁に接して3本1組の柱穴が全体を4分するように検出された。しかし3柱それぞれの付設時期は不明である。また竪穴南東部床面に径約40cmほどのピットが検出されたが、3号竪穴住居跡床面上のピット同様、竪穴住居跡全体を把握することができないが、当竪穴住居跡の主柱穴の1つであろうと思われる。床面は平坦で、壁下に周溝はみられない。

南端部に開口部径約90cmほどのピットが検出されたが、確認作業はできなかった。

2号竪穴住居跡同様、竪穴内埋積土中より土器が放棄された状態で出土した。

E 5号竪穴住居跡 (Fig 4, PL 5〔1〕・〔2〕, 6)

1号竪穴住居跡の炉跡の埋積土を当竪穴住居跡周溝が切り込み、4号竪穴住居跡埋積土を掘り込んで竪穴を築造した痕跡が検出されたことより (PL 5〔1〕), 1号竪穴住居跡, 4号竪穴住居跡より新しい竪穴であることが、発掘調査の段階で判明した。

壁下にめぐらされたと思われる周溝より、当竪穴住居跡を計測してみると、プランは径約5mの円形で、床面は1号竪穴住居跡床面と同一にし、柱穴はNo.17・18・19・20が主柱となるものと思われ、又周溝外のNo.21・22・23のピットは、当竪穴住居跡と関係ある柱穴と思われる。床面上より、Fig 15, PL 15の石器が出土した。

F フラスコ状ピット (Fig 4, PL 7)

1号竪穴住居跡・5号竪穴住居跡と切り合い関係にあるが、5号竪穴住居跡床面上の埋積土層上から掘り込まれており、5号竪穴住居跡より新しい時期に築造されたものである。開口部径1.2m、底径2.3m、高さ1.5mで、埋積土中よりFig 16, PL 16の遺物が出土した。

G 不整楕円形竪穴・袋状土塚墓 (Fig 5, PL 8〔1〕・〔2〕・〔3〕・〔4〕)

台地南縁付近で検出された竪穴住居跡群から、北東側約15m離れて単独で検出された。大きな不整楕円形竪穴の内に掘り込まれた袋状ピットが墓塚である。

外側の不整楕円形竪穴は、長軸約2.6m、短軸約2.1m、地山から深さ12~20cmほど掘り込んで築造されている。現存する床面は比較的平坦で、東壁寄りに長軸約30cm、短軸約23cm、深さ約20cmの楕円形ピットと、その周囲に、巾約5cm、長さ25~30cmほどの溝が不規則に検出された。また床面西側には20×20cmほどの方形ピットと、径約20cmの円形ピット、南西隅に巾約12cm、深さ約5cm、長

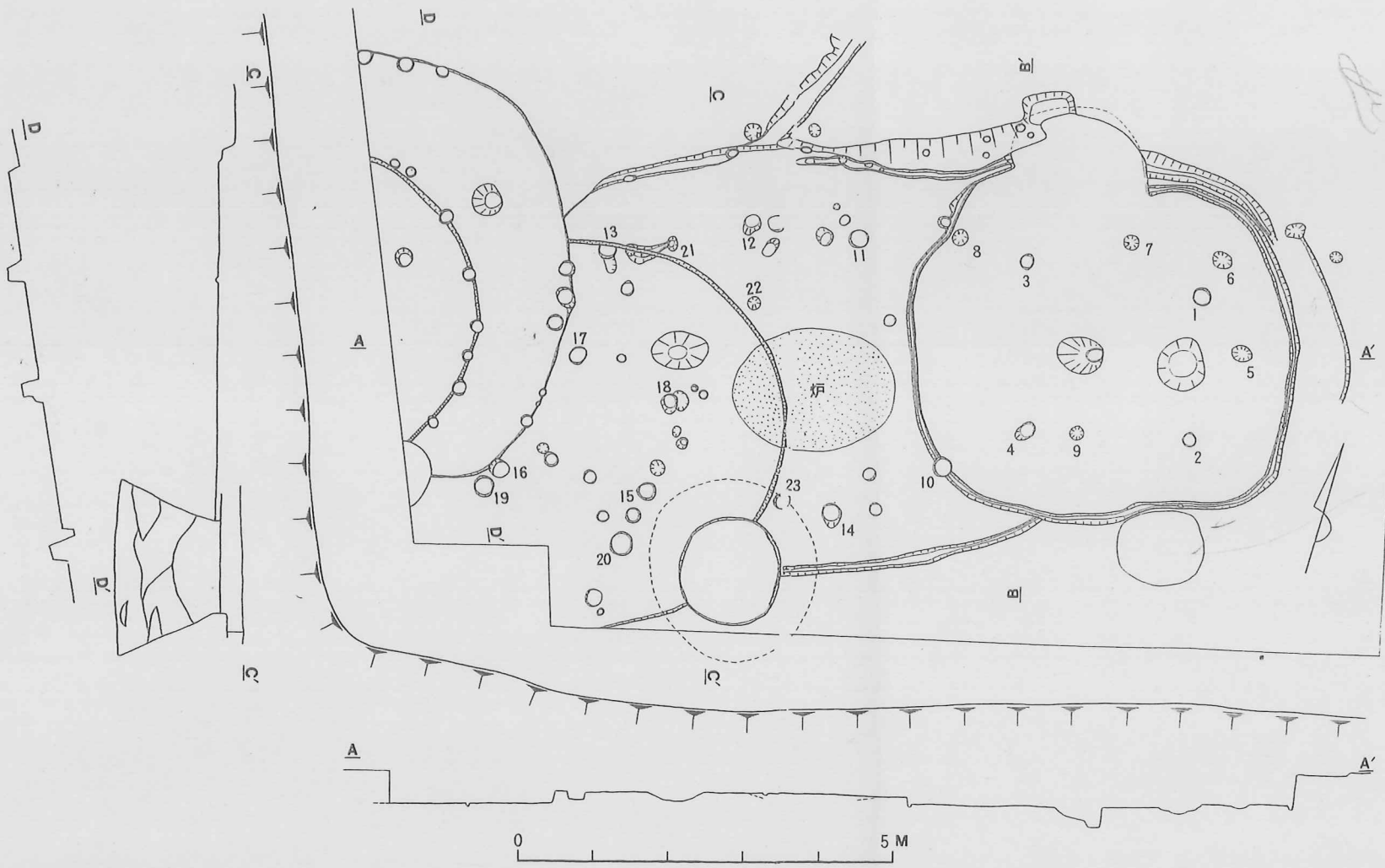


Fig 4 豎穴群實測圖 (1/5大)

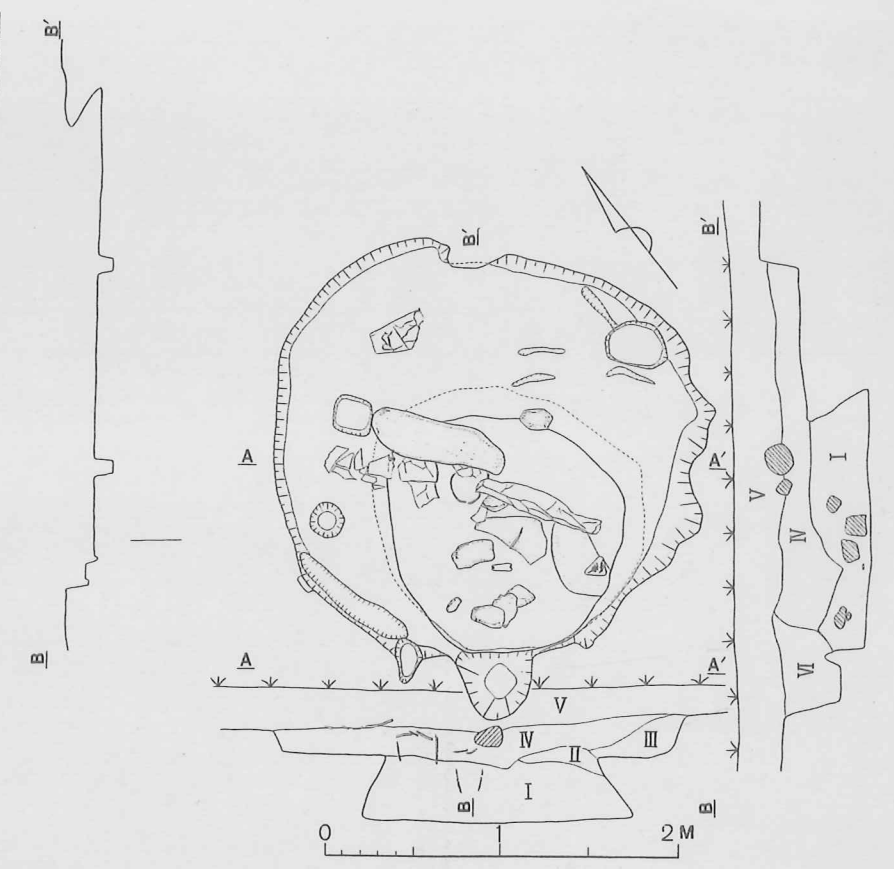


Fig 5 不整橢圓形豎穴·土塚墓實測圖 (1/5大)

さ約70cmの溝がみられる。竪穴床面上より完形土器1個を検出した(PL 8〔4〕)。この不整楕円形竪穴の掘り込み面を検出したレベルで、袋状ピット上横位に長さ約80cm、厚さ約20cmほどの河原石と長さ約70cm、厚さ約15cmの山石計2個が検出された(PL 8〔1〕)。

土塚墓と思われる袋状ピットは不整楕円形竪穴南側床面に、開口部長軸約1.5m、短軸約1.3mの不整楕円形で検出され、調査の結果その深さは、不整楕円形竪穴床面より約35cm掘り込み、底径は最っとも長いところで約1.65m、短いところで約1.4mというやはり不整楕円形であった。

埋積土は、土塚内に黒色土(I層)、ピット上位面東側に褐色土(II層)、不整楕円形竪穴内東壁寄りに、褐色土ブロックをわずかにふくむ黒色土(III層)、III層を除きほぼ不整楕円形竪穴内に充満していた混合土(IV層)および表土一耕土(V層)である。不整楕円形竪穴南端、土塚内に土が埋積した後、長軸約55cm、短軸約35cm、深さ約30cmの、平面楕円形、断面すり鉢形のピットが掘り込まれた痕跡があり、大きな褐色土ブロックを含む混合土が埋積していた(VI層)。

土塚内埋積土中には、河原石が8個、床面より3~15cmほど上位に置かれ、大きいものは、長さ約55cm、厚さ約20cm、小さいもので長さ約15cm、厚さ約8cmほどのものである。また土塚南東部、I層・IV層接合面より三角形の刻線石が、土塚床面上約5cmより石錘が出土した。

土塚内の埋積土中より、1個体の土器が検出されたが、それはI層中より土器胴下部から底部、IV層中より胴中央部、IV層上位面より、口縁部破片というふうに出土し、胴下部及底部のものと、胴中央部のものは約10cmほどずれており、又口縁部破片は、胴中央部器体に蓋をするごとく置かれていた。これらを復原したものがFig 17, PL 11(2)の土器である。

Ⅲ 遺物について

本遺跡において発掘した土器の多くは、竪穴住居跡廃屋後できたくぼみに放棄されたもので、遺構と直接関連づけて考えることのできるものは、2号竪穴住居跡床面上出土の完形土器、フラスコ状ピット内埋積土中出土の土器、不整楕円形竪穴床面出土の完形土器1個体、土塚墓内埋積土中出土の完形土器だけである。出土した土器の多くは破片で、形状知るに足るまで復原できた土器のは、2号竪穴住居跡埋積土中の放棄土器の中から4個体、2号竪穴住居跡床面上から出土した1個体、4号竪穴住居跡埋積土中の放棄土器の中から1個体、不整楕円形竪穴床面上出土の1個体、土塚墓内埋積土中から出土した土器1個体、このほか、全体の4分の1ほどの破片でしかないが、比較的形狀の明瞭なものに、フラスコ状ピット内埋積土中より出土した土器2個体がある。本報告書に掲載した土器は、数多い破片の中から代表的なものを選んだものである。

石器の多くも放棄された土器と伴出したものが大部分であり、遺構・土器と関連づけてみること

のできるものは、5号竪穴住居跡床面上、フラスコ状ヒット内土塚墓内出土のものだけである。

尚、挿図中の土器は、断面の右に外面、左に内面を配し、土器胎土中に含まれる砂粒については、2mm以上を礫、1.9~0.5mmまでを粗砂粒、0.5mm以下を細砂粒とした。

A 2号竪穴住居跡埋積土中出土遺物

○土器破片

Fig 6~9、10、(56)、PL 9~13、14 (56) は、2号竪穴住居跡廃屋後のくぼみに、放棄された土器群のうちの代表的土器である。

1は、内外面とも暗褐色で、外面には媒が付着している。胎土中に粗砂粒とともに同大の石英粒が含まれ、器壁内にはわずかではあるが植物繊維が混入されている。外面には右下りの細い燃糸文が口縁から施文されているが、それは2回にわたって行なわれ、最初の燃糸文は浅く、その方向は口縁に対して右下りに10°~15°である。2回目の燃糸文は深く、その方向は右下りに30°~35°で、それは5条1組の回軸により、その幅は約2cmほどである。内面には条痕文が施文され、口縁下2cmまでは、口縁と並行に、その下端からは、口縁に対して右下りに30°内外で施文されている。条痕文の各条には、条と同方向に細い筋痕が明瞭で、これは貝殻によるものではなく、植物茎を櫛状に工作したような工具により施文されたものと思われる。

2は、外面褐色、内面は磨かれており暗褐色である。胎土中には細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維が混入され、焼成が不十分なためか器体は脆弱である。外面には口縁に対して右下り15°内外、条の幅3mmという太い燃糸文が施文されている。内面は現存する節圍ではすべて化粧粘土が貼られ磨研されており、おそらく全体的にそのようであったと思われる。

3は、外面暗褐色、内面黒色で、胎土中には粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁中には多量の植物繊維を混入する。外面は植物茎を束ねたようなハケ状の工具により、口縁と並行に調整が行なわれた後、左下りの条間の広い燃糸文が、浅く施文されている。内面の口縁部は、ヘラ状工具により、口縁一周に調整がなされ、ゆるい「く」字型のカーブを描く。

4は、外面黄褐色部分的に媒が付着している。内面は暗褐色である。3同様胎土中には多量の粗砂粒・細砂粒が含まれ、器壁内には多量の植物繊維を混入している。口唇には製作時にか、使用中時か、発掘作業によったものではない凹みが見られる。現況では、口縁は大ぶりの山型を描くものと思われ、その凹みは山型の最頂部に位置している。このことより凹みは、製作時に施された凹文であろうと思われる。外面は3同様、植物茎を束ねたようなハケ状工具により、口縁と並行に調整が行なわれ、その後右下りの条間の広い太い燃糸文が、深く施文されている。内面は指による調整が行なわれており、指押圧がまちまちであったためか部分的に凹凸が見られる。

5は、胴体部破片であるが、外面黄褐色、内面黒色で、礫・細砂粒をわずかに含み、器壁内には植物繊維はみられない。外面に右下りの条間の広い太い燃糸文が、浅く施文されている。内面には条

痕文が施こされているが、1と同様、各条内に条と同じ方向に細い筋痕がみられ、やはり植物茎を束ねた櫛状の工具による施文と思われる。

6は、胴体部破片で、外面黒色、内面暗褐色、胎土中には細砂粒を含み、器壁内に植物繊維はみられない。外面は植物茎をハケ状に束ねたような工具で横位に調整された後、左下りの条間の広い太い燃糸文が、浅く施文されている。内面には条痕文が施こされており、それは、1・5と同様に植物茎を束ねた櫛状工具によるものと思われる、各条の太さ深さはまちまちである。

7は、内外面とも暗褐色で、胎土中に多量の粗砂粒を含み、器壁中に多量の植物繊維を混入する。口唇には指頭押圧による凹文があり、凹文底部には爪型が残っている。外面は細い右下りの燃糸文が施文されているが、その方向は口縁に対して25°内外である。内面には右下りの条痕文が施こされており、それは1・5・6同様植物茎を束ねたような櫛状工具によるものと思われる。

8は、内外面とも黄褐色で、胎土中には細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には口縁に並行な燃糸文を施文した後、多軸絡条体回転文が施文されている。内面には化粧粘土が貼られ横位にヘラ状工具で磨研されている。

9は、内外面とも黄褐色で、胎土中に多量の粗砂粒・同大の石英粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入している。口唇には1cm間隔で、指頭押圧による凹文が施されている。口縁部文様帯は4.5cmほどあり、上部5mmは無文帯、その下部には結節部の狭い結節回転文が施文されている。口縁部文様帯と体部文様帯を画するものはみられず、口縁部結節回転文様帯下限からすぐに縦位の燃糸文が施文されている。

10は、外面黒色、内面暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁中にわずかではあるが植物繊維を混入する。焼成は不良で、器体が脆弱なうえ表面が剥離する。口唇には7mmほどの間隔で、丸棒状工具による押圧凹文が施文されている。口縁部文様は外面がかなり剥離しているため鮮明ではないが、単位文様が曲線を描いていることより、多軸絡条体回転文ではなく、結節回転文であろうと思われる。

11は、内外面とも黒色で、胎土中に細砂粒を含み、器壁内に植物繊維を多量に混入している。口唇には2cm間隔で指頭押圧凹文が施文され、凹文底部には爪型がみられる。口縁部文様は、多軸絡条体の回転文と思われる。

12は、外面暗褐色、内面黒色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口唇には丸棒状工具による押圧凹文が施文されているが、現況ではその間隔は、1.2cm、1.5cmと不規則である。口縁部文様は結節回転文が施文され、内面は、細い植物茎を束ねたと思われるハケ状工具で調整されている。

13は、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内にわずかではあるが植物繊維を混入し、器厚は3～5mmと他に比べやすい。口唇には指頭押圧による凹文が施文され、凹文底部には爪型がみられる。口縁部には斜位の太い燃糸文が施文され、内面には横位の浅い条痕文が施文されているが、その工具は不明である。

14は、内外面とも暗褐色、胎土中に細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には細い燃糸文が縦位に施文されており、内面は化粧粘土が貼られ磨研されている。

15は、内外面とも明褐色、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維を混入する。口唇には2.5cmの間隔で、丸棒状工具による押圧凹文を施文している。口縁下4cmに、高さ1.3cmほどの一条の貼付隆突帯をめぐらし、その頂部にも3cm間隔で、丸棒状工具による押圧凹文を施文している。口縁頸部の隆突帯により画される口縁部文様帯には、右下りの条間の広い燃糸文が浅く施文され、胴体部上部にも同様の燃糸文が施文されているが、これらの文様は、隆突帯を貼付けた後に、施文したものである。内面は、植物茎を束ねたようなハケ状工具により横位に磨研されている。

16は、外面暗褐色、内面黒色で、胎土中に礫・粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。15同様貼付隆突帯は口縁部下にめぐらされていたものと思われ、口縁部文様は、縦位に条間の広い細い燃糸文が施文されており、それは隆突帯下にもみられるが、15同様、隆突帯を貼付けた後に施文したものである。胴体部文様は、隆突帯下の縦位の燃糸文帯下端から、右下りに同様の燃糸文が施文されている。内面は指によって調整されているが、指押圧が一様でないためか、所々に凹凸がみられる。

17は、内外面ともに暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁が大きく外反し、胴体部がふくらむ大形甕形土器の破片であろう。口唇には1cm間隔で丸棒状工具による押圧凹文が施文され、口縁頸部には二条の隆帯がめぐらされており、隆帯上には口唇と同様の丸棒状工具による押圧凹文が1cm間隔で、隆帯上下位と隆帯間にも同様の押圧凹文が1.3cm間隔で施文されている。口縁部と胴体部に結節間5mmという狭い結節回転文が施文されており、この結節回転文を施文した上に、二条の隆帯を貼付けたものである。内面は、ヘラ状工具により横位に調整されている。

18は、外面黒色、内面明褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。現存部は口縁頸部と胴上部破片で口縁頸部に二条の隆帯が明瞭であるが、その上位にもう一条隆帯があった跡が残っており、三条の隆帯がめぐらされていたものと思われる。隆帯上には、丸棒状工具により押圧凹文が1cmの間隔で施文され、隆帯上下位と隆帯間にもやはり同様の押圧凹文が、1.3cmの間隔で施文されている。胴体上部文様には、結節間5mmの結節回転文が施文され、その下限に胴体部文様として右下り、左下りの燃糸文が施文されているが、それは、胴体部上部の燃糸文が施文された後、胴体部上部の結節回転文が施文されたものである。内面には化粧粘土が貼られ、指頭により調整されている。

19は、外面明褐色、内面黒色で、胎土中には粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁頸部破片で、現存する状態では一条の幅広い隆帯がめぐらされているが、隆帯1cm上位に、もう一条の隆帯痕が明瞭で、すくなくとも二条の隆帯がめぐらされていたことがわかる。隆帯は幅1.5cmほどのもので、隆帯上には押頭押圧による凹文が、1.7cm間隔で施文されている。こ

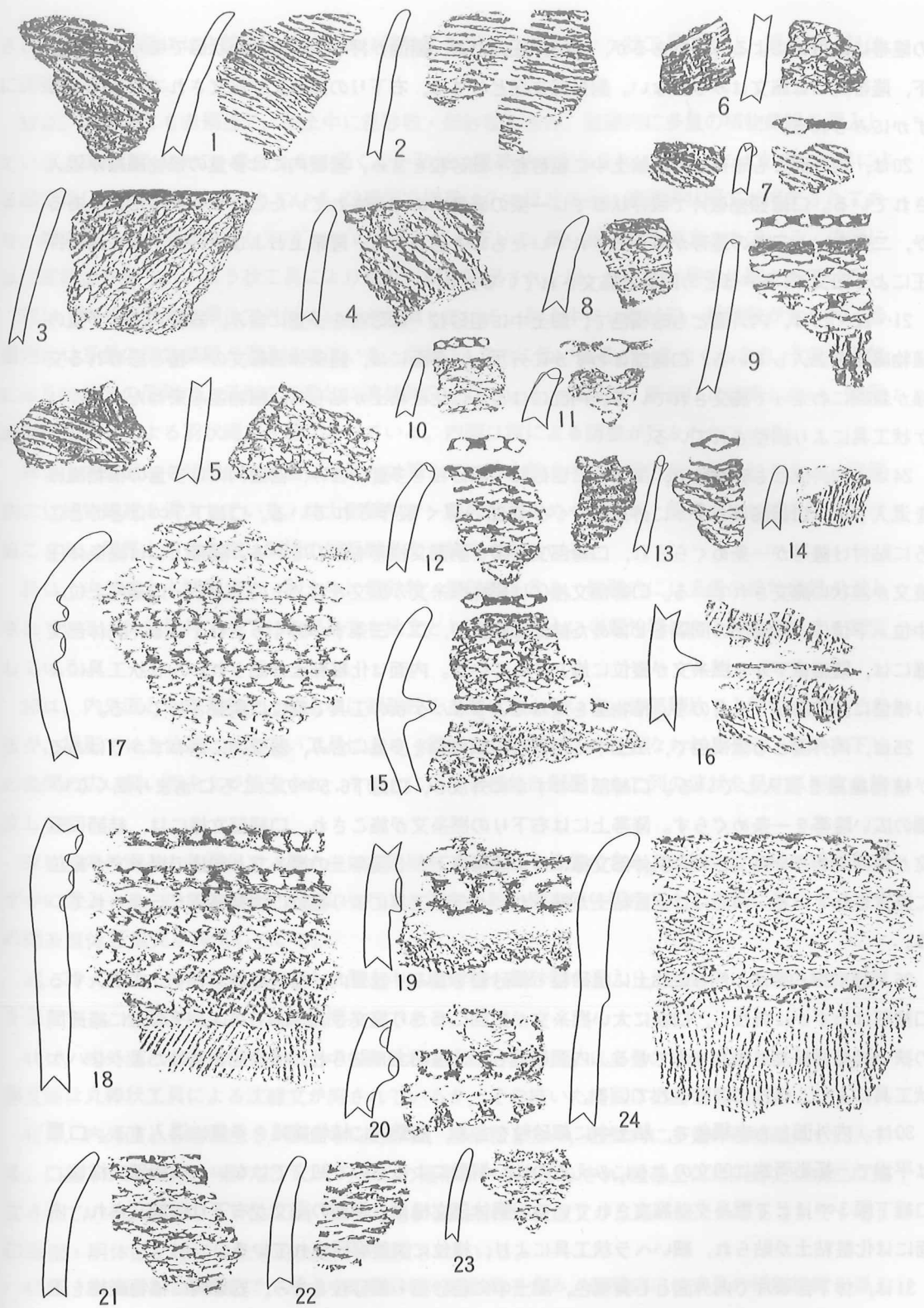


Fig 6 2号豎穴埋積土中出土土器 (1/3大)

の隆帯は貼付けによるものであるが、指頭押圧のため、断面が押しつぶされた状態であり、隆帯上下、隆帯間には施文はみられない。胴体部文様としては、右下りの燃糸文が施文されているのがわずかにみられる。

20は、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維が混入されている。口縁頸部破片で現存状態では一条の隆帯がめぐらされていたことがわかるだけであるが、二条ないし三条の隆帯がめぐらされていたものと思われる。隆帯上およびその上下位に指頭押圧による凹文が1.5cmほどの間隔で施文されている。

21・22・23は、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁内には多量の植物繊維を混入している。口縁部はわずかに外反し、外面には、絡条体回転文の一種と思われる文様が数回にわたって施文されている。内面にはともに化粧粘土が貼られ、植物茎を束ねたようなハケ状工具により調整されている。

24は、内外面とも赤褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁内には多量の植物繊維を混入する。口縁部はわずかに外反し、くびれ部が厚く製作されている。口縁下7cmほどのところに貼付け隆帯が一条めぐらされ、口縁部文隆帯と胴体部文様帯を画している。隆帯上には絡条体圧痕文が波状に施文されている。口縁部文様には網様燃糸文が施文され、その上から、口縁部上位・中位・下位に、結節部の間隔をせばめた結節回転文が、二・三条ずつめぐらされている。胴体部文様には、隆帯直下から燃糸文が縦位に施文されている。内面は化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されたのち、植物茎を束ねたようなハケ状の工具で縦位に調整されている。

25は、内外面とも黒褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁内にはわずかではあるが植物繊維を混入している。口縁部はわずかに外反し、口縁下6.5cmのところにあまり高くない幅の広い隆帯を一条めぐらす。隆帯上には右下りの燃糸文が施こされ、口縁部文様には、結節回転文が数回にわたり施文され、胴体部文様には、隆帯直下から隆帯上の燃糸文と同様の燃糸文が縦位に施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により縦位に調整磨研が行なわれている。

26・27・28・29は、ともに胎土に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に植物繊維をわずかに混入する。口縁部はわずかに外反し、口縁に太い燃糸文が数回にわたり施文され、26・28は、その上に結節間の狭い結節回転文が施文されている。内面はともに化粧粘土が貼られ、植物茎を束ねたようなハケ状工具により、横位に調整されている。

30は、内外面とも赤褐色で、胎土中に細砂粒を含み、器壁内に植物繊維を多量に混入する。口唇は平坦で、拓影両端に凹文のように見えるのは、剝離によるもので凹文ではない。口縁部文様は、口縁下幅3cmほどで燃糸文が施文されている。胴体部文様は、単節の縄文が右下りに施文され、内面には化粧粘土が貼られ、細いヘラ状工具により、横位に調整磨研されている。

31は、体下部破片で内外面とも黄褐色、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に植物繊維を混入する。外面の文様は上位に右下りの燃糸文が施文され、下位には横ナデがみられ燃糸文が擦り消

されている。内面には化粧粘土が貼られ、植物茎を束ねたようなハケ状工具により、縦・横・斜位に調整されている。

32は、内外面とも赤褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入している。口縁下7.5cmに一条のあまり高くない貼付け隆帯がめぐらされ、隆帯上には丸棒状工具による凹文が1.5cm間隔で施文されている。口縁部文様帯は7cmほどあり、結束羽状縄文が施文されており、胴体部には、隆帯に対して75°~80°のわずかに右下りの、細い燃糸文が施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研された後、指により縦位に磨かれている。

33は、内外面とも暗褐色で外面には媒が付着している。胎土中には粗砂粒・細砂粒が含まれ、器壁内には多量の植物繊維が混入されている。口縁下4.7cmに低い隆帯が一条めぐらされ、その上下位には5mmほどの間隔で、爪形文が縦位に連続施文されている。口縁部・胴部には結束しない、斜行縄文の組合せによる羽状縄文が施文されている。内面は指による調整が行なわれている。

34は、内外面とも暗褐色で外面には媒が付着している。胎土中には粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内には植物繊維を混入している。体上部破片で一条の隆帯がめぐらされ、隆帯上には燃糸圧痕文が施こされ、隆帯上下位文様は同様の回転燃糸文が施文されている。

35は、内外面とも明褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維が混入されている。体部破片で右下りの燃糸文を地文として、その上に半載竹管による押型圧痕文を施文している。

36は、内外面とも赤褐色で、胎土中に細砂粒を多量に含んでいる。体部破片で上下位は不明であるが、拓影では上位端に先の尖い工具により、鋸歯文状の削り込みが行なわれ、その下位に左下りの条間の広い細い燃糸文が施文され、その上に爪形を横位に配置した二列の波状を呈す爪形文を施文している。

37は、内外面とも黄褐色で、胎土中には粗砂粒・細砂粒を多量に含み、器壁内には植物繊維をわずかに混入する。口縁部破片で口縁に並行する三条の細い燃糸原体圧痕文と、それに直交する縦位の燃糸原体圧痕文を施文している。

38・39・40は、体部破片で、ともに胎土中に粗砂粒・細砂粒を混入し、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面文様はともに網様燃糸文である。

41は、内外面とも暗褐色で、胎土中に細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維を混入する。外面文様は丸棒状工具による沈線文が施されているが、その描いた構図は把握できない。

42は、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒、細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁下3.5cmに低い幅の広いつくり出しの隆帯が一条めぐらされ、隆帯上には爪形文が横位に施文されている。隆帯の上下位には、燃りの異なる燃糸原体圧痕文が二条一組でめぐらされている。口縁部・胴体部文様には結束羽状縄文が施文されている。

43は、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒・粗砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維を混入する。器厚1.5cmから1.7cmと厚く、胴体部破片である。外面には多軸絡条体の回転文が数回にわた

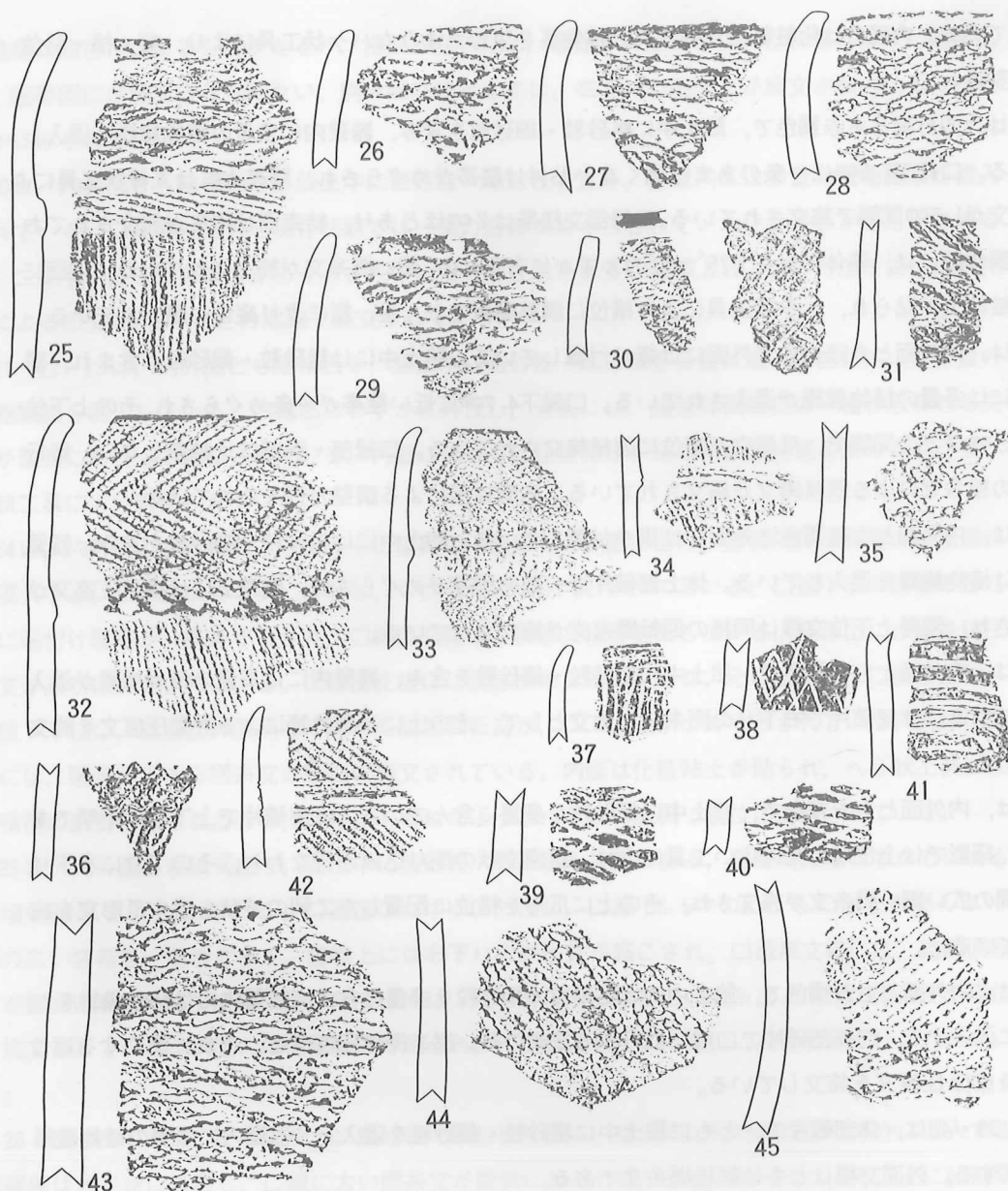


Fig 7 2号豎穴埋積土中出土土器 (1/3大)

って施文されている。内面には化粧粘土を貼り、横位にヘラ状工具で調整磨研した後、縦位に植物茎を束ねたようなハケ状工具で磨いている。

44は、外面暗褐色、内面黄褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には太い右下りの縄文が浅く施文されている。内面は化粧粘土が貼られ、指により調整磨研がされている。

45は、外面黄褐色、内面暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を

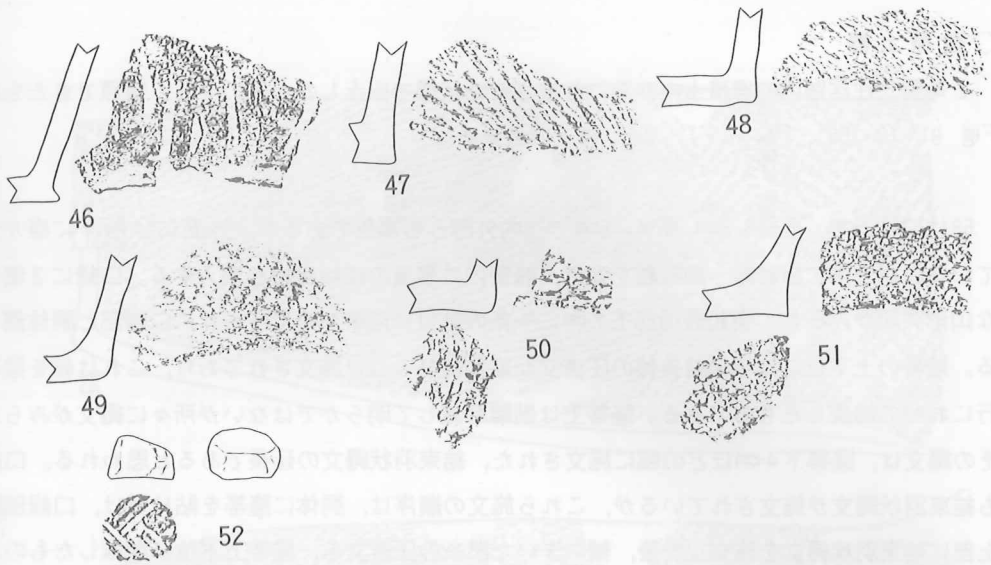


Fig 8 2号竖穴埋積土中出土土器 (1/3大)

混入する。外面には、斜位の燃糸文が施文され、その上にそれとは反対方向の斜位の燃糸文が施文されている。内面は化粧粘土が貼られ、指による調整が行なわれている。

46は、底部破片、外面褐色、内面黒色で媒が付着している。胎土中には粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。底縁部はくびれ、底縁が張り出している。外面には浅い縄文が施文され、その上を丸棒状工具のようなもので、下位から上位の方向へひっかいている。

47、48は、底部破片、ともに外面褐色、内面黒色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内には多量の植物繊維を混入する。47の外面には右下りの太い燃糸文が底縁まで深く施文されている。48の外面には右下りの細い燃糸文が数回にわたり底縁まで施文されている。

49は、底部破片、内外面とも黄褐色で、内面には媒が付着している。器壁内に細砂粒を多量に含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には底縁まで太い燃糸文が浅く施文されている。

50は、底部破片、外面褐色、内面黒色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面の文様はあまり明瞭ではないが、多軸絡条体の回軸文が施文されているようである。底外面には、植物茎を束ねたような櫛状工具で、ひっかいたような深い擦痕が不規則にみられる。

51は、底部破片で、内外面とも黄褐色、胎土中に粗砂粒、細砂粒を含み、器壁内に植物繊維を混入する。外面底縁まで斜行縄文が施文され、底外面には、それよりわずかに太い縄文が施文されている。

52は、ボタン状土製品とでも称すべき形状のもので、置くと一番安定する平坦面に、2mmほどの植物茎を3~4本束ねた、櫛状工具のようなもので施文が行なわれている。

○復原土器

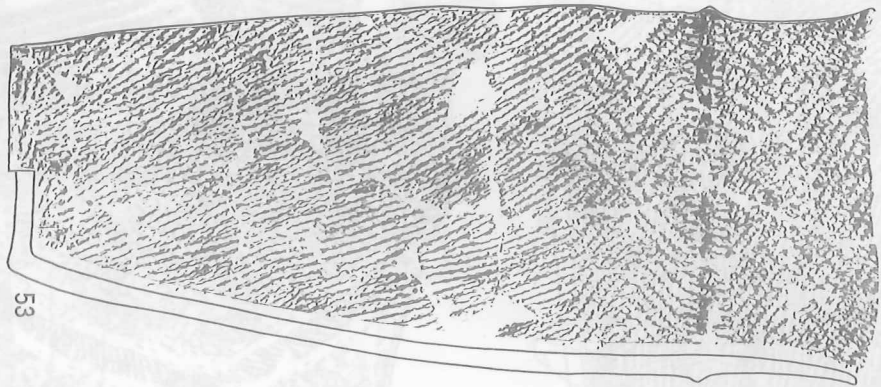
2号竪穴住居跡内の埋積土中から、放棄された状態で出土した土器のうち、復原できたものは、Fig 9・10 (56)、PL 10・11 (56) の4例である。

53は口径15cm、底径8.3cm、高34.5cmで、内外面とも褐色であるが、外面には所々に媒が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁に3個の大きな山形突起がみられ、突起最頂部下7cmに一条の貼付け隆帯がめぐらされ、口縁部と胴体部を画する。隆帯の上下位には単軸絡条体の圧痕文が縦位にびっしり施文されており、これは軸を隆帯と並行において施文したものである。隆帯上は剝離磨滅して明らかではないが所々に縄文がみられる。その縄文は、隆帯下4cmほどの幅に施文された、結束羽状縄文の延長であると思われる。口縁部にも結束羽状縄文が施文されているが、これら施文の順序は、胴体に隆帯を貼り付け、口縁部胴体部上部に結束羽状縄文を施文した後、軸にまいた燃糸の圧痕文を、隆帯上下位に配置したものである。胴体部には右下りの燃糸文が施文されているが、それは隆帯上下位に施文された単軸絡条体を回軸したものであろう。この燃糸文は底縁部で横位に施文される。底部は揚げ底である。

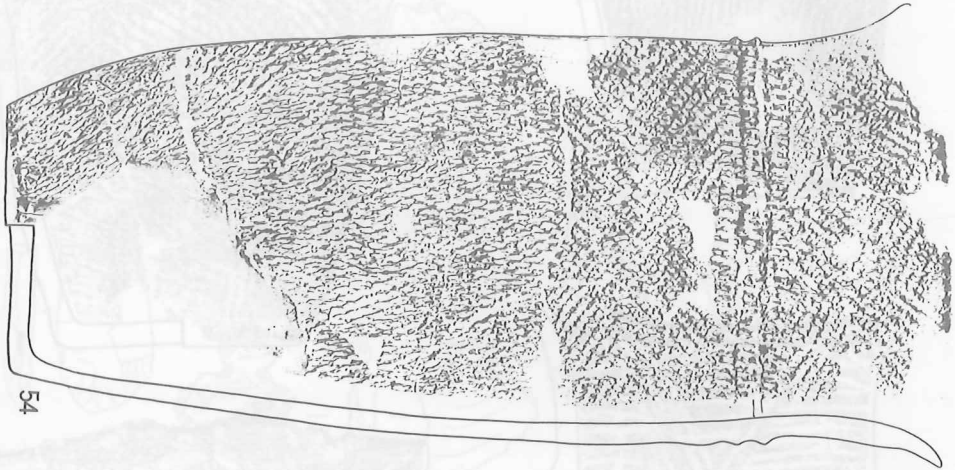
54は、口径18.3cm、底径10.5cm、高36.5cm、内外面とも赤褐色で、外面には媒が付着している。胎土中には粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁部は外反し、口縁下6.5cm～7.5cmの間に二条の貼付隆帯がめぐらされている。隆帯上下位と隆帯間には縦位に爪形文が施文されている。口縁部から隆帯下6cmまで結束羽状縄文がみられるが、隆帯及び爪形文はこれら羽状縄文が施文された後にめぐらされている。胴体部には、縦位に燃糸文が施文され、底縁部ではそれが右下りに施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、それは植物茎を束ねたようなハケ状工具により調整されているが、胴体部では縦位に、口縁部では横位に行なわれている。底部はわずかに揚げ底である。

55は、口径14cm、底径推定7cm、高推定33.5cmで、現存する部分は、底部をわずかに欠いているにすぎない。色調は内外面とも暗褐色で外面に媒が付着している。胎土中に細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入するが、粘土がきわめて緻密で、焼成がよかったためか、非常に堅固である。口縁はゆるやかな波状を描き、口縁下6.5cmに一条の隆帯をめぐらす、それは隆帯上下位から器壁を寄せ集めて造り出した隆帯である。口縁部・胴体部文様はともに右下りの単節の斜行縄文であるが、それは口縁部で一担区切り、隆帯下から施文しなおしたもので、隆帯は口縁部文様施文前にめぐらされ、隆帯上に所々口縁部の斜行縄文の延長がみられる。隆帯上には1.3cm～1.5cmの間隔で、爪形文が横位に施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、幅5mmほどのヘラ状工具により調整磨研されているが、それは胴体部では縦位に、口縁部では横位に行なわれている。

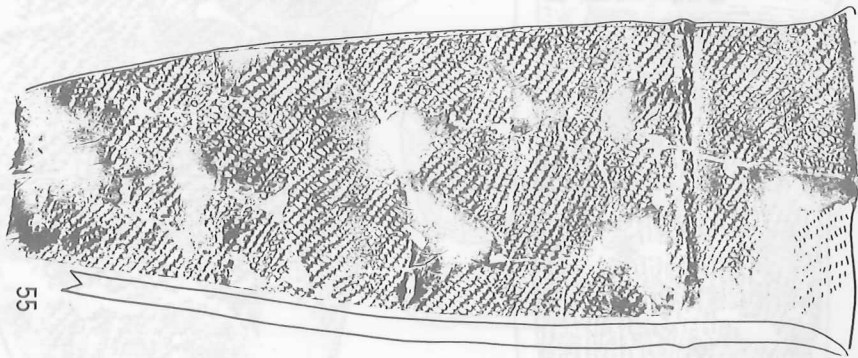
56は、口径15.5cm、底径9.2cm、高24cm、色調は内外とも褐色で、外面口縁部に媒が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁は局部的に波状を示し、口唇はヘラ状工具により平坦に調整されている。口縁から底縁まで燃糸文が施文されているが、口



53



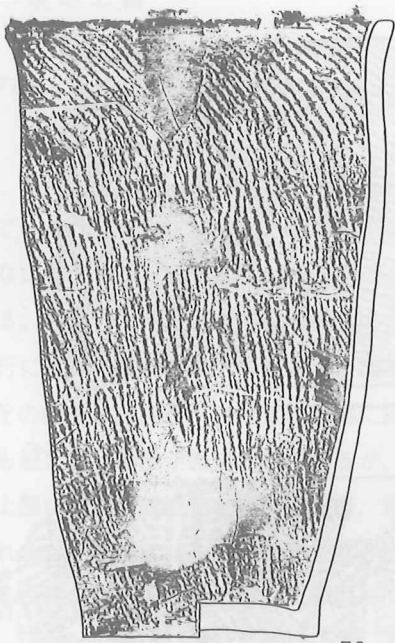
54



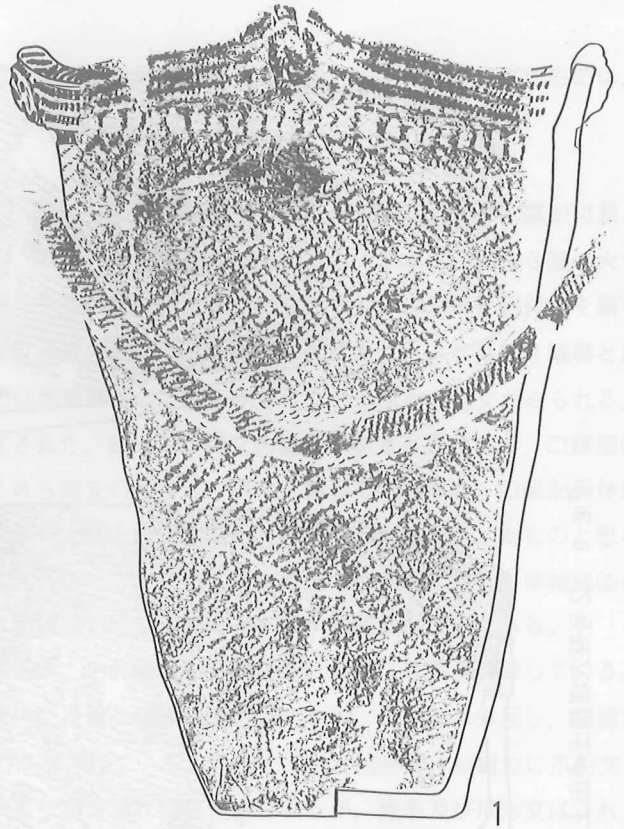
55

Fig 9 2号壜穴埋積土中出土復原土器 (1/3大)

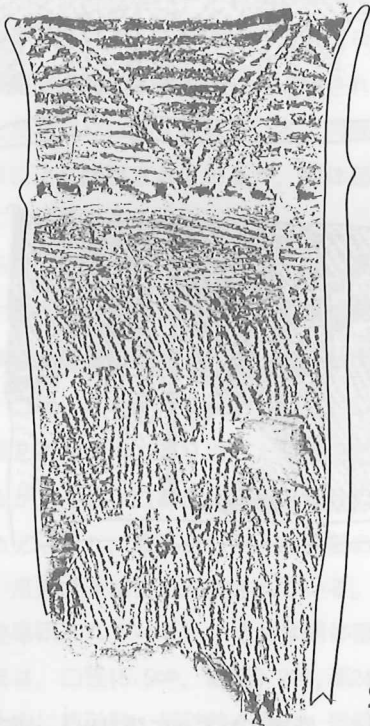
縁部付近では斜位に、胴体部ではほぼ縦位に施文されている。底縁はわずかに張り出し、底部は揚げ底である。内面は磨かれているが、その工具方法は明らかではない。



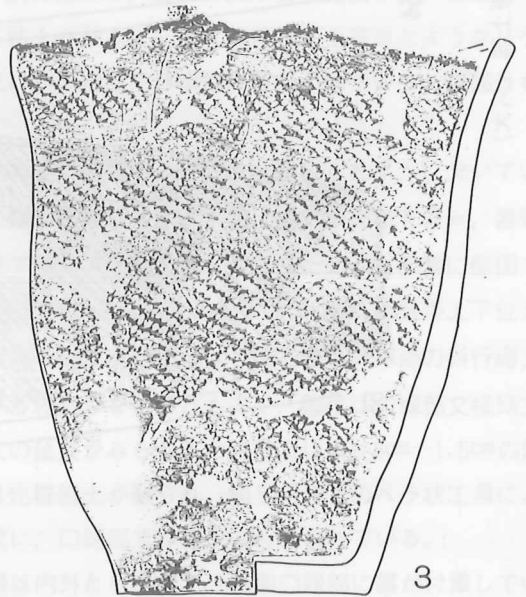
56



1



2



3

Fig 10 2号竖穴床面上・4号竖穴埋積土中，不整楕円形竖穴出土復原土器（ $\frac{1}{3}$ 大）

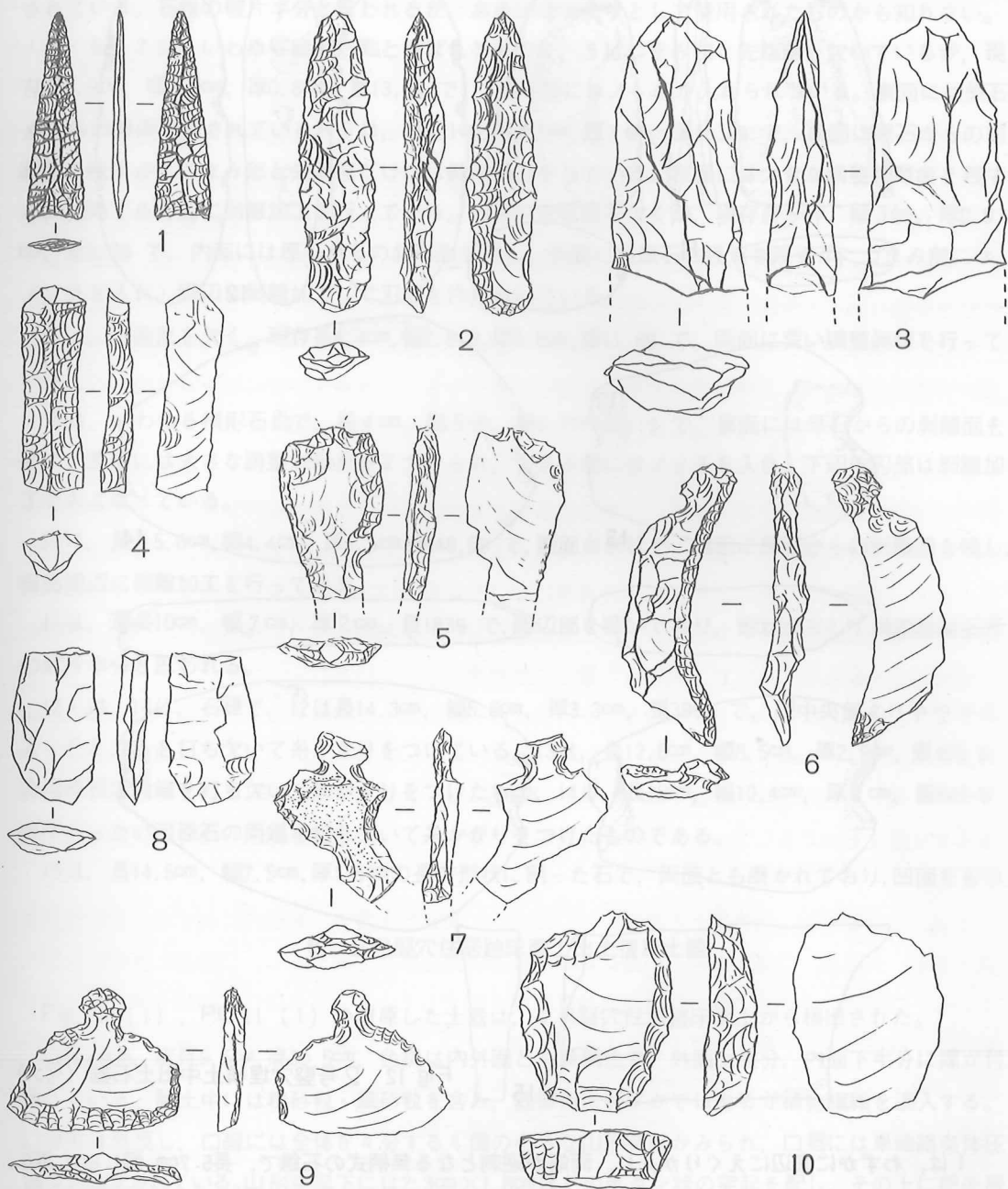


Fig 11 2号竖穴埋積土中出土石器 (1/2大)

○石 器

2号竖穴住居跡内埋積土中の、放棄された土器と伴出した石器は、Fig 11・12, PL 12の15個である。このほか20cm~30cm, 大きいものは50cm大の河原石がかなり伴出した。

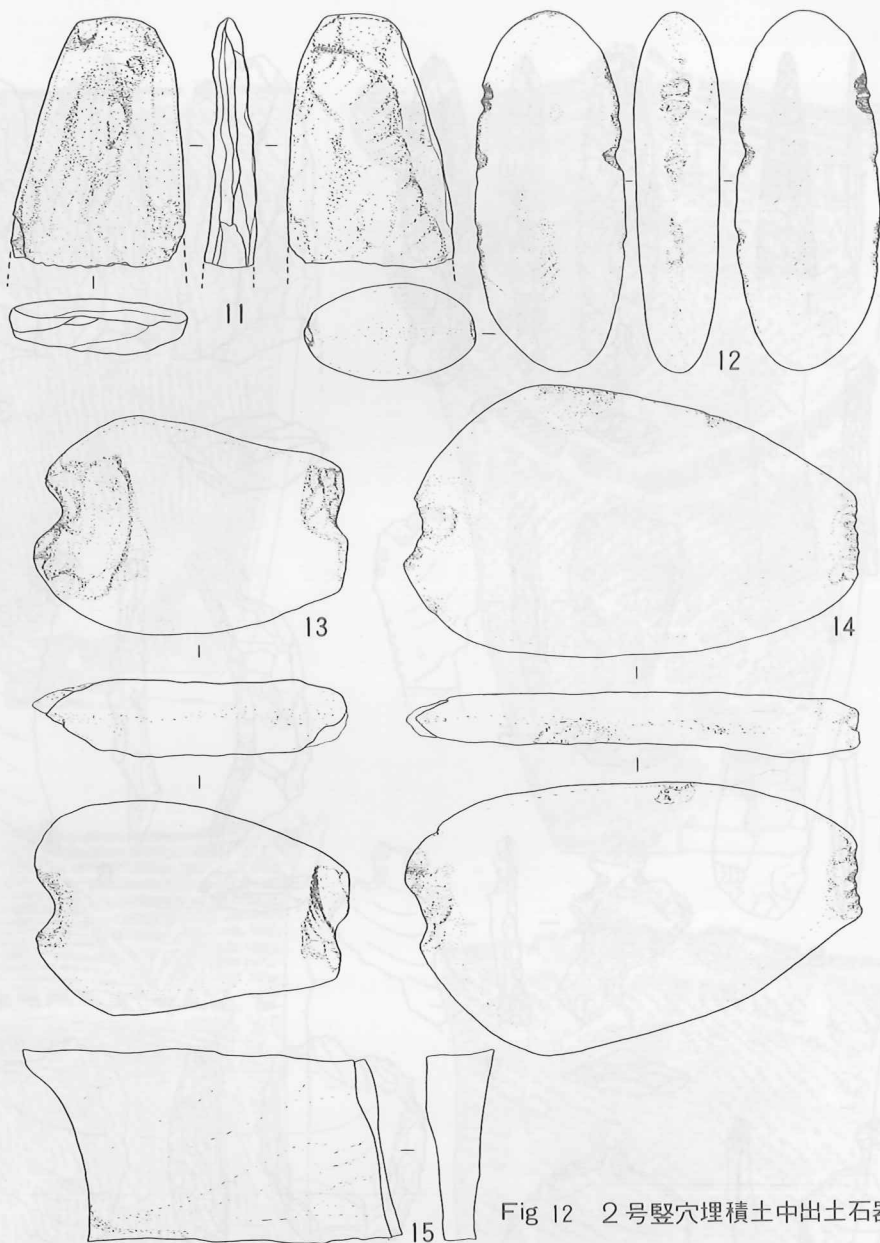


Fig 12 2号竪穴埋積土中出土石器 (1/3大)

1 は、わずかに底辺にえぐりが入り、両端が逆刺となる無柄式の石鎌で、長5.7cm、幅1.6cm、厚0.4cm、重2.9g、全面剥離加工されている。

2 は、小型の石槍で、長8.6cm、幅2.2cm、厚1.2cm、重23.6g、全面に荒い調整をしており、先端は鋭利さが欠けている。

3 は、大型石槍の破片半分と思われる。現存長8cm、幅4cm、厚2cm、重62g、石材は頁岩で、全体に荒い調整が行なわれている。

4 は、断面三角形で、現存長6cm、幅1.8cm、厚0.8cm、重14.1gで底面をのぞいた面に調整剥離がな

されている。石錐の破片半分と思われるが、あるいはナイフとして使用されたものかも知れない。

5・6・7は、いわゆる縦形石匙と呼ばれるもので、5はつまみ部と先端部を欠いているが、現存長4.9cm、幅2.9cm、厚0.8cm、重13.8gで、つまみ部にはノッチが入れられている。裏面には原石からの剝離面が残されている。6は、長8.1cm、幅1.7cm、厚1cm、重15.2gで、裏面は原石からの剝離面を残すが、つまみ部と先端部だけには剝離加工をしている。表面には大きな調整剝離痕を残すが、内湾する刃部に剝離加工を行っている。7は、先端部を欠くが、現存長5cm、幅3cm、厚0.9cm、重8.2gで、内面には原石からの剝離面を残し、表面にも原石の残滓を残すが、つまみ部には、ノッチを入れ、両辺は剝離加工して刃部を作り出している。

8は、上端部を欠く、現存長4.4cm、幅2.6cm、厚0.8cm、重11.8gで、両面に荒い調整剝離を行っている。

9は、いわゆる横形石匙で、長4cm、幅5cm、厚0.7cm、重11gで、裏面には原石からの剝離面を残す。表面には大きな調整剝離痕が2つみられ、つまみ部にはノッチを入れ、下辺の刃部は剝離加工をおこなっている。

10は、長さ5.6cm、幅4.4cm、厚1.5cm、重48.5gで、断面台形状で、裏面に原石からの剝離面を残し、表面周辺に剝離加工を行っている。

11は、現長10cm、幅7cm、厚2cm、重183gで、周辺部を磨いており、形状からして局部磨製石斧の破片半分と思われる。

12・13・14は、石錘で、12は長14.3cm、幅5.8cm、厚3.3cm、重395gで、胴中央部よりややかたよったところを打ち欠いて糸かがりをつけている。13は、長12.5cm、幅8.5cm、厚2.9cm、重405gの河原石の両端を打ち欠いて糸かがりをつけたもの、14は、長18cm、幅10.4cm、厚2cm、重645gの平べったい河原石の両端を打ち欠いて糸かがりをつけたものである。

15は、長14.5cm、幅7.5cm、厚1.5cmの長方形に割った石で、両面とも磨かれており、凹面をもつ。

B 2号竪穴住居跡床面上出土復原土器

Fig 10 (1), PL 11 (1)の復原した土器は、2号竪穴住居跡床面上から検出された。

口径23cm、底径9.5cm、高30.5cm、色調は内外面とも黄褐色で、外面上半分、内面下半分に煤が付着している。胎土中には粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内にわずかではあるが植物繊維を混入する。口縁部は外反し、口縁には全体を4分する4個の小さな山形突起がみられ、口唇には単軸絡条体圧痕文が施文されている。山形突起下には2.3cm×1.8cmほどのボタン状の突起を配し、その上に撚糸原体の圧痕文を施文している。口縁下2.5cm、ボタン状突起下を結ぶ線に、半載竹管による縦位の連続刺突文が一条めぐらされ、口縁部文様帯と胴部文様帯を画している。口縁部には横位に三条の撚糸圧痕文が、各ボタン状突起を結ぶように施文されている。胴体部には底縁まで、結束羽状縄文が施文されている。底部はわずかに揚げ底である。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により調整磨研されているが、胴体部は斜位に、口縁部は横位に行なわれ、口頸部は角度をもつ「く」字型になる。

C 4号竪穴住居跡内埋積土中出土遺物

○土 器

4号竪穴住居跡内の埋積土中に放棄されていた土器は、1号竪穴住居跡内のそれとは量的には少なかった。Fig 10 (2)・13, PL 11 (2)・13に掲載したのはその代表的なものである。

Fig 13の1は、口縁部破片で、外面褐色、内面黒色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内にわずかではあるが植物繊維を混入する。外面は細い結束羽状縄文が施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

2は、口縁部破片、内外面とも黒色で粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面は口縁上部に二条の燃糸原体の圧痕文をめぐらし、それから下位に結束羽状縄文を施文している。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

3は、口縁部破片、内外面とも黄褐色で、胎土中にわずかに細砂粒を含み粘土は緻密である。器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁はゆるやかな山形カーブを描くものと思われ、現存状態では、口縁下2cmに隆帯を一条めぐらし、隆帯上および上下位に、燃糸原体の圧痕文を隆帯と並行にめぐらす。隆帯により画された口縁部文様帯には、やはり横位の燃糸原体圧痕文が四条めぐらされ、最後に山形突起最頂部から隆帯上まで、二条の懸垂状の燃糸原体圧痕文が施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

4は、口縁部破片、内外面とも暗褐色で、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁下3.5cmに幅1cmの広い隆帯をめぐらし、隆帯上には太い燃糸原体圧痕文を、下位には細い単軸絡条体圧痕文をめぐらす。口縁部には、上位と中位に燃りの異なる二条一組の燃糸原体圧痕文をめぐらしている。内面は化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

5は、口縁部破片、内外面とも黄褐色で、胎土中に細砂粒を含み、器壁内にわずかに植物繊維を混入する。外面は、口縁下3cmに三条の細い単軸絡条体圧痕文をめぐらし、口縁部と胴体部を画している。口縁部には同様の細い単軸絡条体圧痕文を施文している。これは口縁部幅3cmという狭い節間に、横長のX字状幾何学文を描くものかも知れない。また口縁から三条の懸垂状の単軸絡条体圧痕文が施文されている。体部文様は右下りの縄文が幅1.5cmの範囲にみられ、その下位には、縄文が縦位に施文されているのを見ることが出来る。内面は調整磨研されてはいるが、その工具方法は不明である。

6は、口縁部破片で、外面黄褐色、内面黒色で、胎土中にわずかに細砂粒を含み粘土は緻密である。器壁内にはわずかではあるが植物繊維を混入する。外面に燃糸原体の圧痕文をめぐらす。現存状態では、口縁から二条・一条・二条・一条・二条の繰り返しを行い、いま1つ二条めぐらしている。燃糸圧痕文間には、小さな丸棒状工具により連続刺突文が、上位三間には1cm間隔で、その下の間には1.5cm～2cm間隔で、最下位間には0.7cm間隔で施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

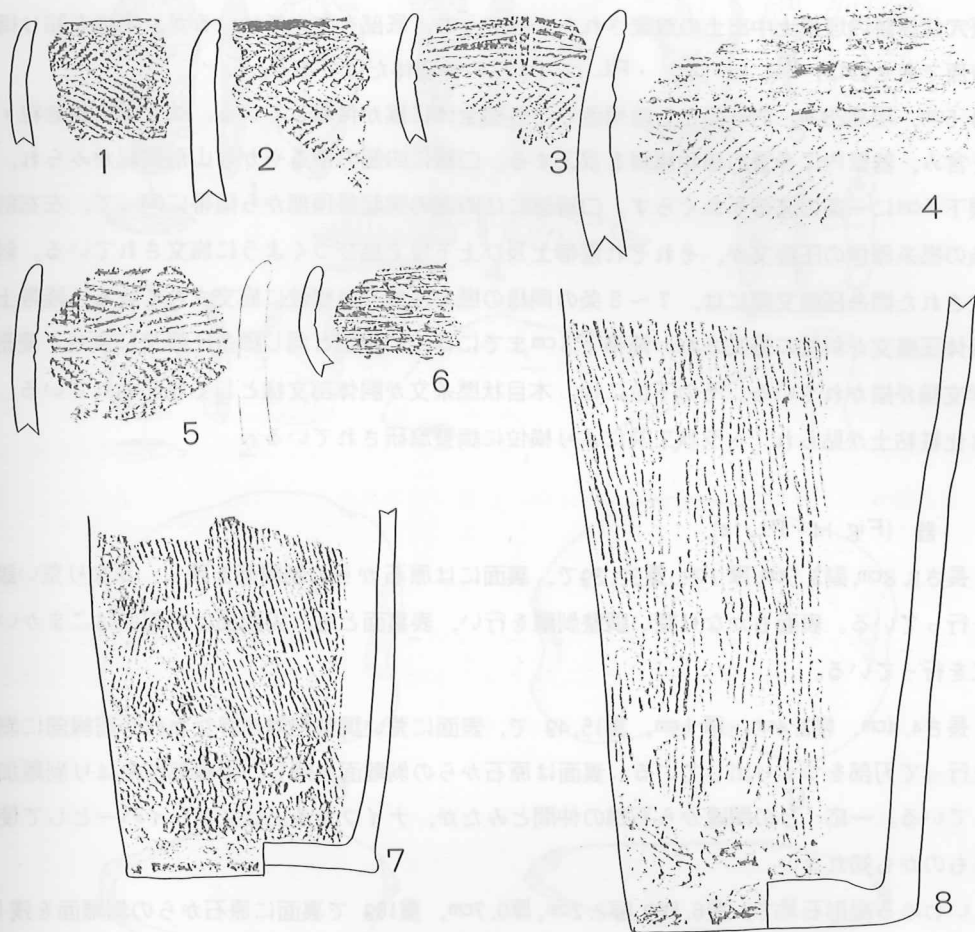


Fig 13 4号竪穴埋積土中出土土器 (1/3大)

7は、底部、内外面とも黄褐色で、外面に媒が付着している。胎土中に細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には縦位に燃糸文が施文され、底縁部では、その上を平坦に調整しているため、凹文だけが並んでいるように見えるが、体部の燃糸文と同様のものである。内面には化粧粘土が粗雑に貼られ、その上を植物茎を束ねたようなハケ状工具で不規則に調整磨研している。底部はいくぶん揚げ底である。

8は、体下部破片、内外面とも暗褐で、外面の上位、内面の上・下位に多量の媒が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内にわずかに植物繊維を混入する。外面は縦位の太い燃糸文を施文し、底縁部には太い左下りの縄文を施文するが、燃糸文と斜行縄文間にわずかではあるが、結束回転文がみられる。内面は縦位に植物茎を束ねたようなハケ状工具により調整磨研されている。底部は平底で、内面底部は、貼付けの際の指による押圧凹帯がみられる。

○復原土器

4号竪穴住居跡内埋積土中出土の放棄された土器のうち、底部を欠いてはいるが、全様を知り得るまで復原できたのは、Fig 10 (2)・PL 11 (2)の一個体だけである。

口径14.5cm、現高28cm、内外面とも暗褐色で、外面全体に煤が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。口縁に四個のゆるやかな山形突起がみられ、突起最頂下7cmに一条の隆帯をめぐらす。口縁部には四個の突起最頂部から隆帯に向って、左右斜位に三条の燃糸原体の圧痕文が、それぞれ隆帯上及び上下位で結びつくように施文されている。斜位に施文された燃糸圧痕文間には、7～8条の同様の燃糸圧痕文が横位に施文されている。隆帯上には絡条体圧痕文が斜位に施文され、隆帯下3cmまでには、口縁部と同じ燃糸圧痕文により、菱形の幾何学文様が描かれている。その下位には、木目状燃糸文が胴体部文様として施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、ヘラ状工具により横位に調整磨研されている。

○石器 (Fig 14・PL 14)

1は、長さ8.8cm、副3.5cm、厚1cm、重32.3gで、裏面には原石からの剥離面を残し、かなり荒い調整剥離を行っている。表面もかなり荒い調整剥離を行い、表裏面とも、尖頭部と柄部にはこまかい剥離加工を行っている。

2は、長さ4.4cm、幅3.4cm、厚1cm、重15.4gで、表面に荒い調整剥離が行なわれ、周縁部に剥離加工を行って刃部をつくり出している。裏面は原石からの剥離面を残し、周縁部にやはり剥離加工を行っている。一応1との関連から石槍の仲間とみたが、ナイフあるいはスクレイパーとして使用されたものかも知れない。

3は、いわゆる縦形石匙で、長6.5cm、幅2.2cm、厚0.7cm、重10gで裏面に原石からの剥離面を残し、つまみ部を剥離加工している。表面は全面に剥離加工が行なわれている。

4は、いわゆる横形石匙で、長5.8cm、幅2.2cm、厚0.4cm、重5.1gで、表裏面とも荒い調整剥離が行なわれ、つまみ部、周縁部に剥離加工を行っている。

5は、現長4.9cm、幅4cm、厚1cm、重16.7gで、裏面に原石からの剥離面を残し、表面は荒い調整剥離が行なわれ、周縁刃部に剥離加工が行なわれている。石錐の上半分破片と思われる。

6は、断面三角形で、長4.7cm、幅1.2cm、厚0.9cm、重4.4gで、各面に原石との剥離面を残し、一边にだけ剥離加工を行って刃部をつくっている。製品か半製品か不明である。

7は、長15cm、幅5cm、厚1.8cm、重195gで、表面に打撃による凹みが二つみられる。石材は砂岩である。

8・9は石錘で、8は長12cm、幅10.5cm、厚5cm、重870g、河原石の両端を打ち欠いて糸かがりをつけたもの、9は長14cm、幅9cm、厚3.5cm、重790gで、河原石の両端を打ち欠いて糸かがりをつけたものである。

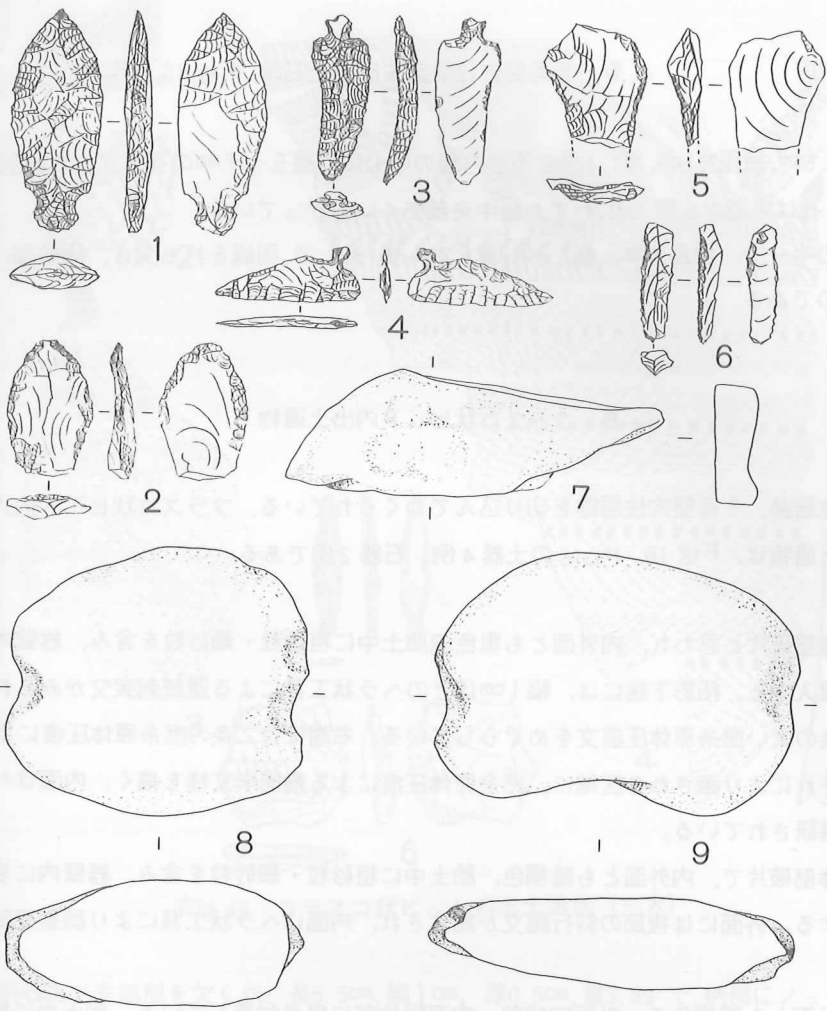


Fig 14 4号竖穴埋積土中出土石器 (1/3大)

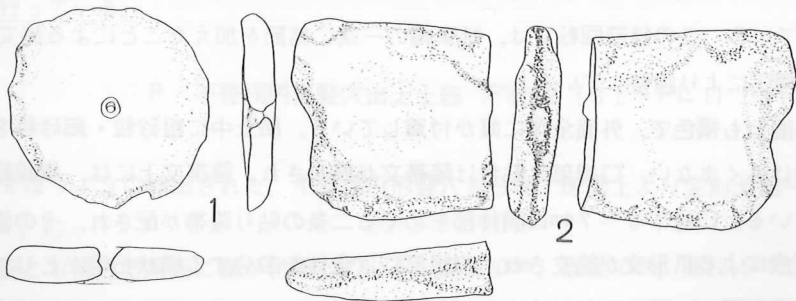


Fig 15 5号竖穴床面上出土石器 (1/3大)

D 5号竪穴住居跡床面出土石器 (Fig 15, PL 15)

1は長径8.5cm,短径7.5cm,厚1.4cmの不整円板の中心に、径5~7mmの孔を穿った凝灰岩製有孔円板である。孔は両面から穿たれ、わずかに中央部でくいちがっている。

2は石錘の半分で、現長8cm,幅7.8cm,厚1.7cm,重195gで、周縁を打ち欠き、両端部に糸かがりをつけたものである。

E フラスコ状ヒット内出土遺物

1号竪穴住居跡、5号竪穴住居跡を切り込んでつくられている。フラスコ状ヒット内の埋積土中より出土した遺物は、Fig 16, PL16の土器4例、石器2例である。

1は、口縁部破片と思われ、内外面とも黒色、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。拓影下端には、幅1cmほどのヘラ状工具による連続刺突文がみられ、その上と上位に一条の太い燃糸原体圧痕文をめぐらしている。右端には二条の燃糸原体圧痕による懸垂文がみられ、それにより画される区域に、燃糸原体圧痕による幾何学文様を描く。内面はヘラ状工具により調整磨研されている。

2は、胴体部破片で、内外面とも暗褐色、胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に多量の植物繊維を混入する。外面には複節の斜行縄文が施文され、内面はヘラ状工具により調整磨研されている。

3は、内外面とも明褐色で、外面口縁部、内面胴体部に媒が付着している。胎土中に細砂粒を含むが粘土は緻密であり、器壁内にわずかに植物繊維を混入する。焼成がよく堅固な器体である。外面は、口縁上部に三条の燃糸原体圧痕文をめぐらし、その下位から結束羽状縄文を施文する。羽状縄文を施文した後、その最上位に丸棒状工具により一条の沈線文を入れ、その下端に結節回転文を一条めぐらしている。この結節回転文は、結束縄の一端に結節を加えたことによる施文かも知れない。内面は指押圧により調整している。

4は、内外面とも褐色で、外面全体に媒が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含み、器壁内に植物繊維はふくまない。口縁部に貼付け隆帯文が施こされ、隆帯文上には、単軸絡条体圧痕文が施文されている。口縁下6~7cmに胴体部をめぐる二条の貼り隆帯が配され、その隆帯間には細い燃糸原体圧痕による爪形文が施文され、口縁部には全体を四分する橋状把手がとりつけられている。各貼付け隆帯間には燃糸原体圧痕文が三条つつ配置されている。胴体部文様は結束羽状縄文が施文されている。内面はヘラ状工具により調整磨研されているが、胴体部のそれは縦位に、口縁部では横位に行なわれている。

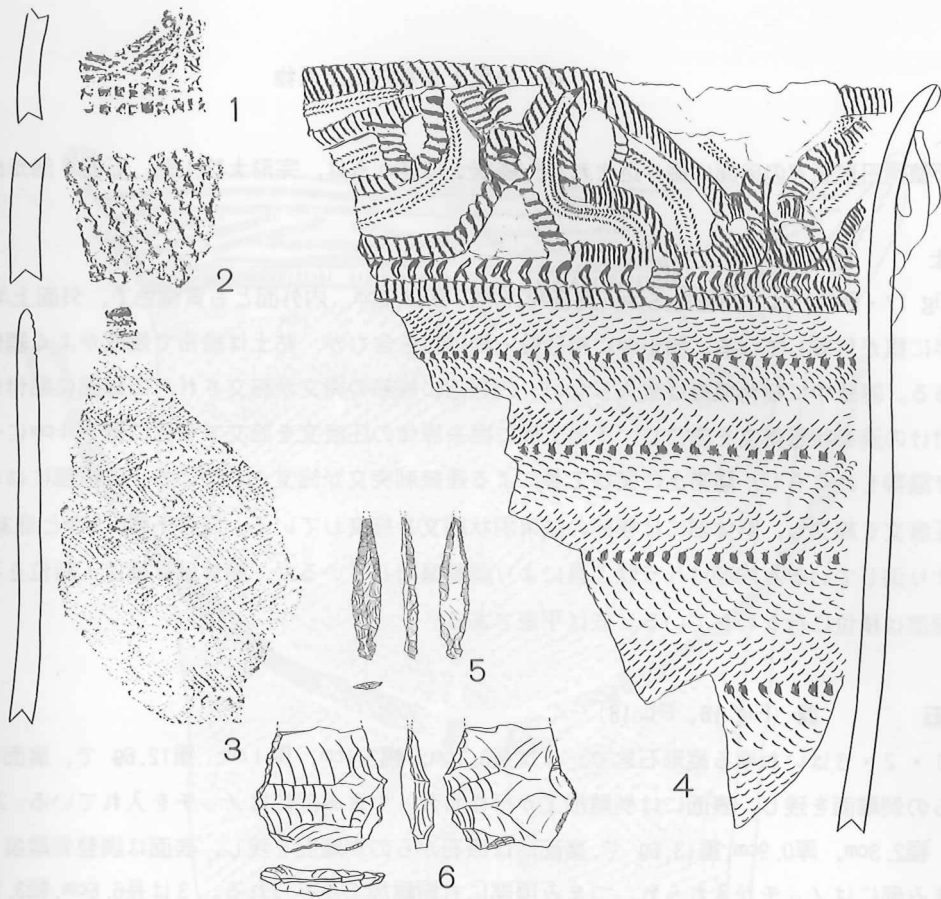


Fig 16 フラスコ状ピット内出土遺物 (1/3大)

5は、有柄石鏃で先端部を欠くが、長5.5cm、幅1cm、厚0.5cm、重3.8gで、柄部にノッチを入れ、表面は全面に剝離加工を行っている。裏面は荒い調整剝離をして、周縁刃部に剝離加工を行っている。石材は瑪瑙である。

6は、長5cm、幅5cm、厚1cm、重24.6gで、表裏面とも荒い調整剝離を行い、周縁部にわずかに剝離加工を行っている。

F 不整楕円形竪穴出土土器 (Fig 10 [3]・PL II [3])

袋状土塚墓を覆うように検出された、不整楕円形竪穴からは、床面上より完形土器一個が出土した (PL 8 [4])。

土器は内外面とも褐色で両面に煤が付着している。口径20cm、底径10cm、高22.5cmで、口縁に四個の山形突起をつける。口唇はヘラ状工具により平坦に調整され、外面には右下りの太い単節縄文が施文され、口縁部、底縁部はすり消されている。底部はわずかに揚げ底で、内面はヘラ状工具により調整されている。

G 袋状土塚墓内出土遺物

不整楕円形竪穴の床面に掘り込まれた、袋状土塚墓からは、完形土器1個、石器6個が出土した。

○土 器

Fig 17・PL 17は、口径33.5cm、底径14.5cm、高47.2cm、内外面とも黄褐色で、外面上半、内面下半に媒が付着している。胎土中に粗砂粒・細砂粒を含むが、粘土は緻密で焼成がよく器体は堅固である。器壁中に植物繊維は混入しない。口唇部に複節の縄文が施文され、口縁部に貼付け山形と貼付けの渦巻状懸垂文を施こし、その上面に撚糸原体の圧痕文を施文する。口縁下4cmに一条の貼付け隆帯をめぐらし、隆帯上に叉状工具による連続刺突文が施文されている。口縁部には単軸絡条体圧痕文を施文し、胴体部には複節の結束羽状縄文を施文している。隆帯下幅0.5cmと底縁部を指ですり消している。内面はヘラ状工具により調整磨研しているが、胴体部は横位・斜位を不規則に、口縁部は横位に行なわれている。底は平底である。

○石 器 (Fig 18, PL 18)

1・2・3はいわゆる縦形石匙で、1は長6.1cm、幅2.1cm、厚1cm、重12.6gで、裏面には原石からの剥離面を残し、表面には剥離加工が行なわれ、つまみ部にはノッチを入れている。2は長6.8cm、幅2.3cm、厚0.9cm、重13.6gで、裏面には原石からの剥離面を残し、表面は調整剥離痕を残し、つまみ部にはノッチが入れられ、つまみ頂部にも剥離加工がみられる。3は長6.6cm、幅3.7cm、厚0.7cm、重16.4gで、裏面に原石からの剥離面を残し、表面には荒い調整剥離痕が残り、周縁刃部に剥離加工が行なわれている。つまみ部にはノッチが入れられている。

4は、長4.2cm、厚2cm、重16.8gで、断面三角形で、一面に原石からの剥離面を残し、荒い調整剥離を一部に行っている。他の二面は調整剥離が行なわれ、陵(刃)部は剥離加工が行なわれている。石槍の破片であろう。

5は、石錘で、長13cm、幅7cm、厚1.8cm、重295gの河原石の両端を打ち欠いて、糸かかりをつたものである。

6は、最長部16.5cm、厚さ2.8cmの三角形凝灰岩に、刻線文様がみられる。袋状ヒット南側、床面から30cmほど上位に出土した。

H 遺跡外発見遺物

PL 19は、遺跡ののる台地下の水田用水路傍で発見したもので、24cm×21cm×11cm大の河原石の一面に使用痕の認められるものである。その使用痕からみて、長い丸棒状のものを磨いたものとみられ、固定して使用する矢柄研磨器ではないかと思われる。

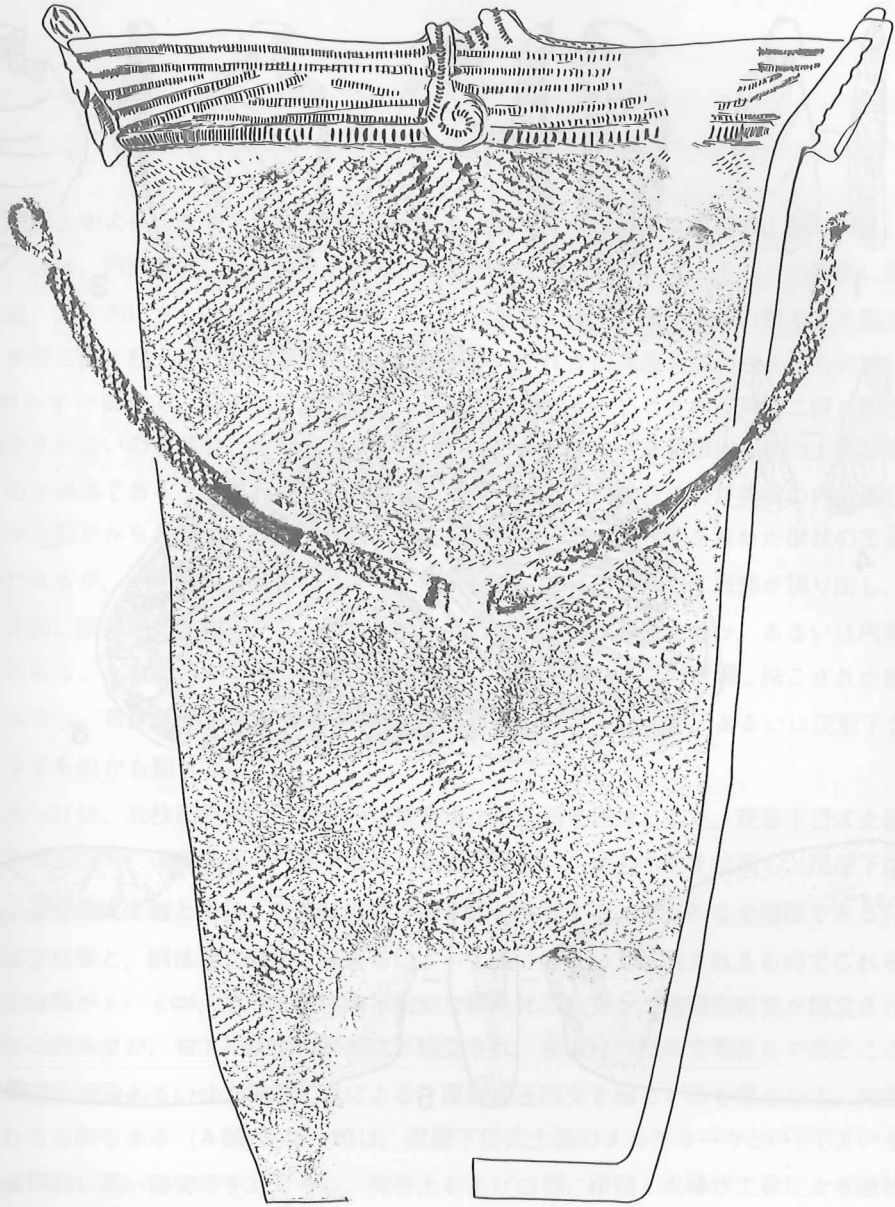


Fig 17 土塚墓内出土復原土器 (1/3大)

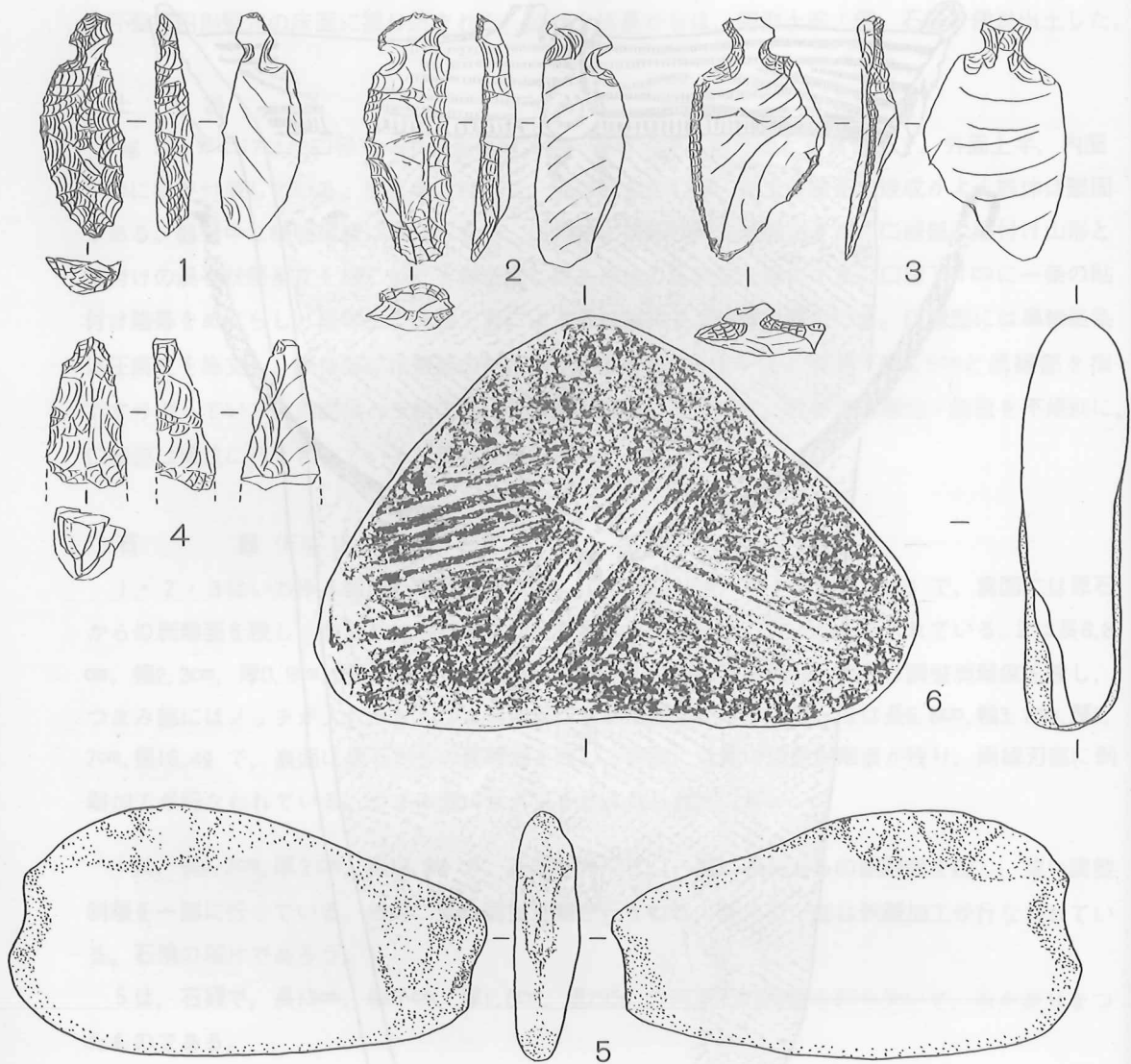


Fig 18 土塚墓内出土石器 (1/2大)

IV 考 察

A 土 器 に つ い て

2号竪穴埋積土中より、放棄された状態で出土した土器は、すべて縄文前期の土器である。1～7・46・50・51は、円筒土器に先行するもので、深郷田系土器とみられる。1～2の器表に燃糸文を施文した後、二次的にさらに重複させた例、3～6の器表に条間の広いための燃糸文を施文している例は、芦野二群a類土器にも近似するが、「器表裏いずれかに条痕を加えられるものは、本群土器295片中わずか数片で、殆ど例外的であることが注意される。」とされる芦野二群a類土器は、条痕文の施文されないのを特徴とする土器であり、1～7は、その点深郷田式系統の土器の範疇に組み入れるのが適当であろう。これらの条痕文は、各条の大きさがまちまちで条痕の内に条と並行するいくつかの筋がみられる。これは、貝殻による施文ではなく、植物茎を束ねた櫛状の工具によるものと思われるが、その類例はいまのところ不明である。46はやや外方に底部が張り出し、50・51のごとく底面に胴体部と同様の文様を施文しているのは、深郷田系の土器か、あるいは円筒下層a式と思われる。4の大ぶりの山形口縁の頂部に施こされた凹文や7の口唇に施こされた指頭押圧凹文は、ふつう、芦野二群・深郷田式土器にはみられないことよりして、あるいは茂屋下岱式土器の祖形をなすものかも知れない。

8～23・26～31は、北秋田郡田代町茂屋下岱遺跡出土の土器を標準とした。茂屋下岱式土器のグループに属するもので、深郷田式と円筒下層a式土器との間に、その中心を位置し、茂屋下岱式土器の前葉は、深郷田式土器と併行、後葉は円筒下層a式と併行すると思われる土器群である。8～14は、口縁部文様帯と、胴体部文様が、隆帯等によって画されないで区別されるものでこれらの一群は口縁部文様帯が5～6cm、すべて横位の不規則な絡条体回転文か、結節回転文が施文され、胴体部には縦位の燃糸文か、右下り斜位の燃糸文が施文され、左下りの燃糸文現在までのところみられない。口唇部に指頭あるいは丸棒状工具による、連続押圧凹文を施こすのを常として、内面には条痕がみられるものもある(A類)。15～20は、茂屋下岱式土器のメルクマークといってよい土器でそれらは口縁頸部に高い隆突帯をめぐらし、突帯および口唇に指頭・丸棒状工具による連続押圧凹文を施文する(15・16)のを常とする一群(B類)と、口縁頸部に隆帯をめぐらす、それは二～三条の複数となり、隆帯およびその上下位・隆帯間・口唇に指頭・丸棒状工具による連続押圧凹文を施し、口縁部に、結節回転文・不規則な絡条体回転文を、施文するのを常とする(17～20)ものにわけられる(C類)。茂屋下岱式土器は、円筒土器とは形状の異なるもの、特にC類土器には、口径40～50cm、高50～60cmという大型土器が多くみられ、それは口縁部が外反し、口頸部に二～三条の隆帯をめぐらし、隆帯上および上・下位・隆帯間に、指頭・丸棒状工具による連続押圧凹

文を施文し、胴体部は中央部が大きくふくらみ、口径と同じまたは少し小さい数値をあらわすのを常として、口縁部および隆帯下文様帯は同一文様で、結節回転文か、不規則な結条体回転文を施文し、内面に条痕文を施文する場合もある。茂屋下岱遺跡で出土した完形の大型土器は、口径44.6cm、高60cm、底径15.6cmで、口頸部の隆帯は円筒下層 a 式の貼付隆帯の特徴である器面に巻きつけた燃糸の上に貼付けるという技法をとっているが、その器形は明らかに円筒土器とは区別されるべきもので、口縁部・隆帯下文様帯に施文された沈線は円筒下層 a 式土器にみられ、c 類にみられる結節回転文の結節部の波状文様を省略したものであろうと考えられる。

茂屋下岱式土器の口縁・胴体上部文様には、結節回転文か、不規則な結条体回転文を施文するのが本来の姿で、茂屋下岱遺跡から出土した大型土器は、茂屋下岱式土器のうち、円筒下層 a 式直前かまたは併行する頃の、茂屋下岱式後葉に位置するものではないかと考えられる。現在までのところ茂屋下岱式土器のグループに属する土器は、米代川以南にはその分布密度がうすく、米代川以北の、米代川とその流域および津軽地方に濃厚にみられる。しかし茂屋下岱式土器自体の編年は現在までのところ明らかにされてはおらず、今後の層序調査の可能な良好な遺跡の調査をまたなければならぬ。21~23・26~29になるとその形状は円筒形に近づき(D類)、これらには円筒下層 a 式のグループに属するものもみられ、茂屋下岱式土器群のもつ複雑性を物語る。38~40の条間の広い燃糸文を、それぞれ反対方向に回転させて重複文様を、つくりだしている器体は、福館遺跡にも見られるが、その意とするところは網様文様であろう。24・25・32・33・50~56は円筒下層 b 式土器で、25はD類からの移行が考えられる。

2号竪穴住居跡床面上より出土したFig 10 (1)・PL 11 (1)は、円筒上層 a 式土器であろう。4号竪穴埋積土中より、放棄された状態で出土した土器の大部分は、円筒下層 C・D式である。フラスコ状ヒット内埋積土中出土の土器のうち、4は円筒上層 a 式であり、3は当地方で初見の土器である。

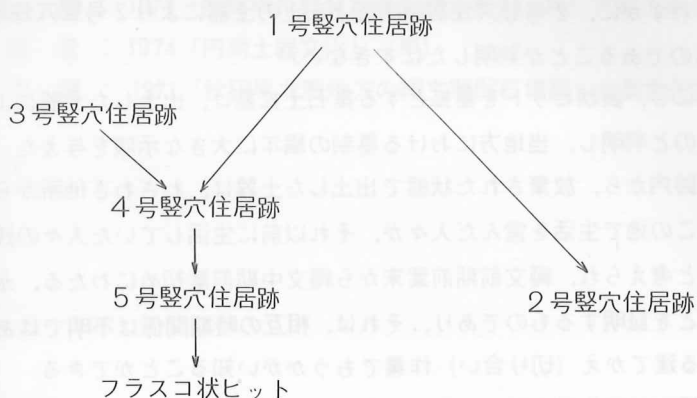
不整楕円形竪穴床面上・土塚墓内出土の復原土器は、円筒上層 a 式土器で、土塚墓内出土の土器は、石神遺跡出土の土器にその類型を求めることができる。

B 遺 構 に つ い て

今次調査で検出された、竪穴住居跡群の各遺構は、それぞれ切り合い関係にある。

1号跡は、平面形11.5m×6.5mという、長大な竪穴住居跡で、当地方ではこのような規模の竪穴住居跡は橋桁遺跡に次いで二例目である。橋桁野遺跡では、長軸両端は確認されておらず時期も不明であるが11m×6mというやはり長大な矩形プランの竪穴住居跡が検出されている。両者の規模は同程度であるが、その形状にはさうとうの違がある。橋桁野の竪穴住居跡には、周溝は認められず、炉も検出されなかった。また床面平坦であるが、当竪穴住居跡のような傾斜するものではない。柱穴も、橋桁野のそれは、径1m前後、深70~80cmほどの大きな掘り方が長辺に沿って三個ずつ対称に六個検出され、当竪穴住居跡とはきわだった違いをみせている。

2号竪穴住居跡は、北側でくずれているが一応隅丸矩形で、四本柱の主柱をもつ当地縄文中期の竪穴住居跡と同様の形状を示している。3号竪穴住居跡・4号竪穴住居跡はともに円形プランで、4号竪穴住居跡は3号竪穴住居跡全体を拡張したようなプランであるが、3号竪穴住居跡には周溝がみられ、4号竪穴住居跡にはそれがない。2号・4号竪穴住居跡とも1号竪穴住居跡を切り込んでいるが、2・4号竪穴住居跡間の前後は不明であり、3号竪穴住居跡と1号竪穴住居跡の前後関係も不明である。5号竪穴住居跡は、4号竪穴住居跡埋積後に築造されたもので、他に比べ、壁高はごく低いものであったと思われる。フラスコ状ヒットは、この5号竪穴住居跡が埋積した後に築造されたものである。これらの新旧関係を図示してみると次のようになる。



このうち2号竪穴住居跡床面上から出土した土器は円筒上層a式土器で、このことより、1号竪穴住居跡は中期前半前葉以前に築造されたこととみることができよう。しかし、それが、茂屋下岱式土器を中心とする、前期前葉末から前期後葉初めの時期にまで逆のぼるものか是不明であり、また茂屋下岱式土器も遺構との結び付きはまったく不明である。今次の発掘調査は、台地のごく一部を行ったにすぎない。きわめて生活条件の良好な地であり、広い台地上には大きな集落跡が広がっていると考えられる。

土塚墓は、不整楕円形の竪穴内に掘り込まれた袋状ヒットで、その埋積土中より出土した土器にり、縄文中期前葉初めのころの墓であることが確認された。土塚墓内には大・小8個の石が入れられ、また土塚墓上に立てわれたと思われる2個の長大な石も検出され、集石土塚墓とも呼称できるものであった。当地方においてこれまで発見された墓と思われる遺構は、餅田遺跡で検出された縄文前期後葉末の円筒下層b式土器を直立させ、口を長い河原石二個で蓋した、カメ棺（深鉢棺）墓があり、墓塚を掘り、石を墓標にするような遺構としては大館市餅田字中道下家敷添49の縄文前期末葉遺跡の組石土塚墓・大館市福館の縄文前期末葉の組石土塚墓がある。この後の縄文中期後半の大木9式を出土した鳴滝遺跡からは、河原石を炉形に組んで、河原石で囲まれた内に、小判型の墓塚を掘る例が検出されている。当地方において縄文前期後葉末の石蓋カメ棺墓・縄文前期末の組石土塚墓・縄文中期前葉の集石土塚墓・縄文中葉後葉の組石土塚墓・縄文後期の配石墓・縄文晩期の組石石棺墓と継ぐことのできる墓制の変遷はきわめて興味ある問題である。

V 総 括

大館市史編さん資料調査のため、昭和49年8月2日から、同年8月15日までの14日にわたり、市内山館の段丘上発掘調査を実施した。その結果、竪穴住居跡五戸、フラスコ状ヒット1、土拡張1を検出し、また縄文前期前葉末から、縄文中期前葉初めの土器の出土をたしかめた。しかし、切り合い関係から竪穴住居跡の時期を確認し得る良好な資料の出土がなく、新旧関係の判明している竪穴群にかかわらず、わずかに、2号竪穴住居跡床面上出土の土器により2号竪穴住居跡が縄文中期前葉初めのころのものであることが判明したにすぎない。

長大な河原石を墓標にし、袋状ヒットを墓拡とする集石土拡張は、出土した土器により、縄文中期前葉初めのころのもので判明し、当地方における墓制の編年に大きな示唆を与えた。

2号・4号竪穴住居跡内から、放棄された状態で出土した土器は、わざわざ他所から運んできて捨てたものではなく、この地で生活を営んだ人々が、それ以前に生活していた人々の残したものを、一ヶ所にまとめたものと考えられ、縄文前期前葉末から縄文中期前葉初めにわたる、永い年月の間人々の営みがあったことを証明するものであり、それは、相互の時期関係は不明ではあるが竪穴住居跡間の幾度にもわたる建てかえ（切り合い）作業でもうかがい知ることができる。

遺跡ののる台地は、眼下に米代川を眺み、背後に奥羽丘陵をもつ、きわめて生活に適した場所で、広い台地上には、古い時代から続いた大集落が存在し、代々の人々の生活の跡が、刻まれているものと考えられる。

謝 辞

末文ではあるが、山館上ノ山遺跡発掘調査にあたり、快く発掘調査を承諾下された、地主の藤原淳助氏、炎天下の中発掘調査に汗して協力下された、県立大館鳳鳴高校社会部諸君に厚く感謝の意を表するものである。

参 考 文 献

- 村 越 潔 : 1968「浮橋貝塚」岩木山 (単)
- 江坂輝弥篇 : 1970「石神遺跡」 (単)
- 名久井文明 : 1971「青森県芦野遺跡の土器群について」考古学雑誌57巻2号
- 奥 山 潤 篇 • 大館鳳鳴高等学校社会部考古学班 : 1971「茂屋下岱式土器群」 (単)
- 奥 山 潤 : 1972「芋掘沢遺跡発掘調査報告書」(単)大館市教委
- 奥 山 潤 : 1973「福館橋桁野発掘調査報告書」 (単) 大館市編委
- 村 越 潔 : 1974「円筒土器文化」 (単)
- 奥 山 潤 : 1971「秋田県北鹿地方の縄文期配石墳墓」北奥古代文化第3号



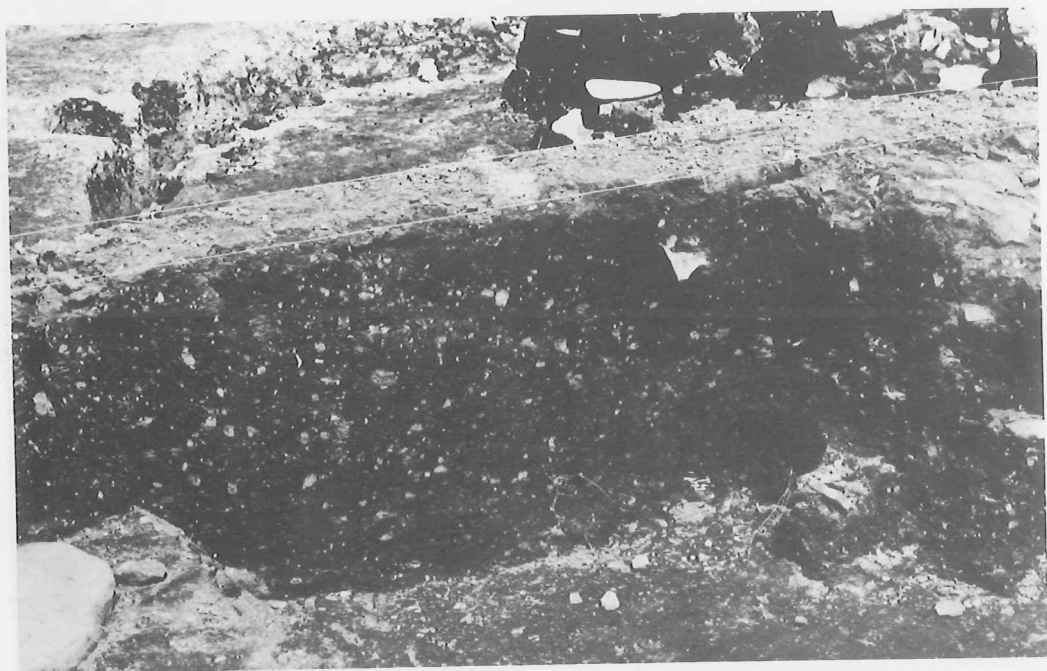
PL 1 遺跡遠望



PL 2 豎穴群全体写真



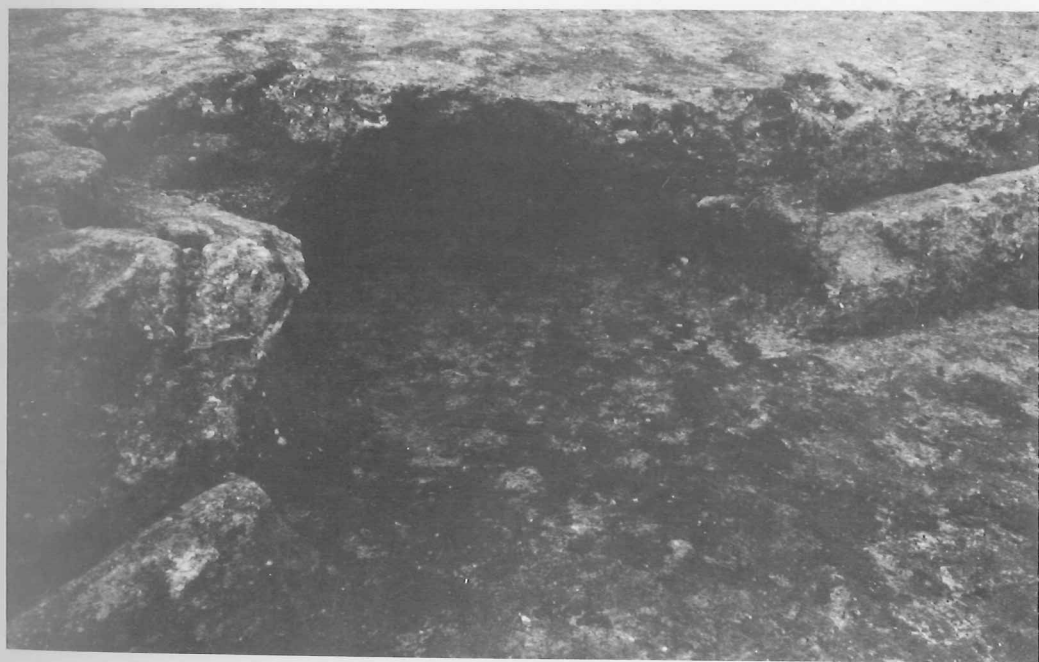
PL 3〔1〕 2号豎穴埋積狀態



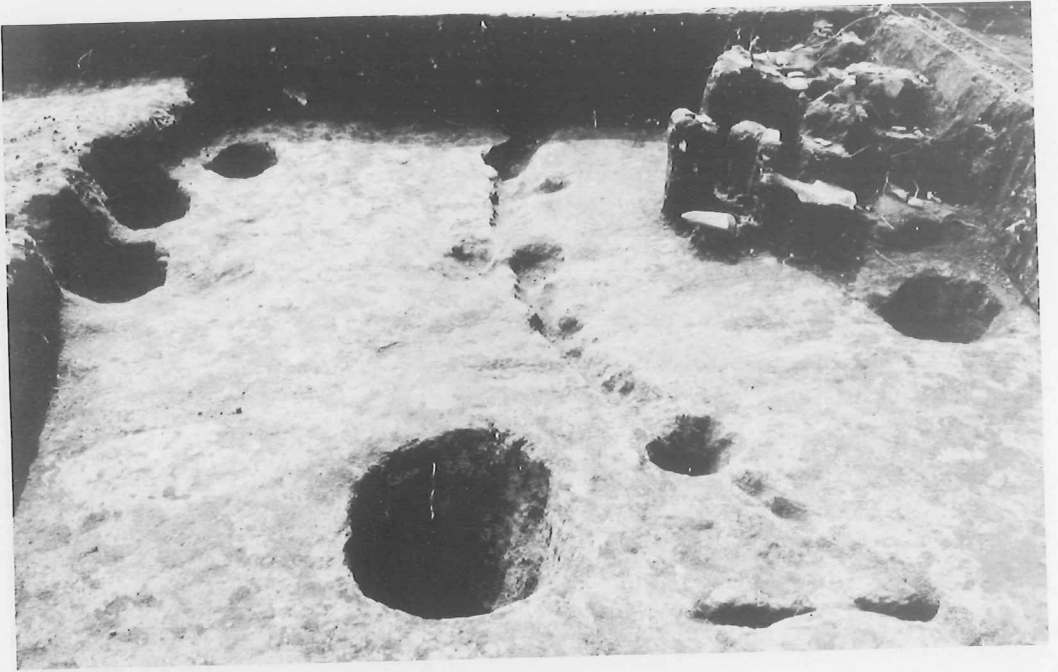
PL 3〔2〕 2号豎穴埋積土層狀態



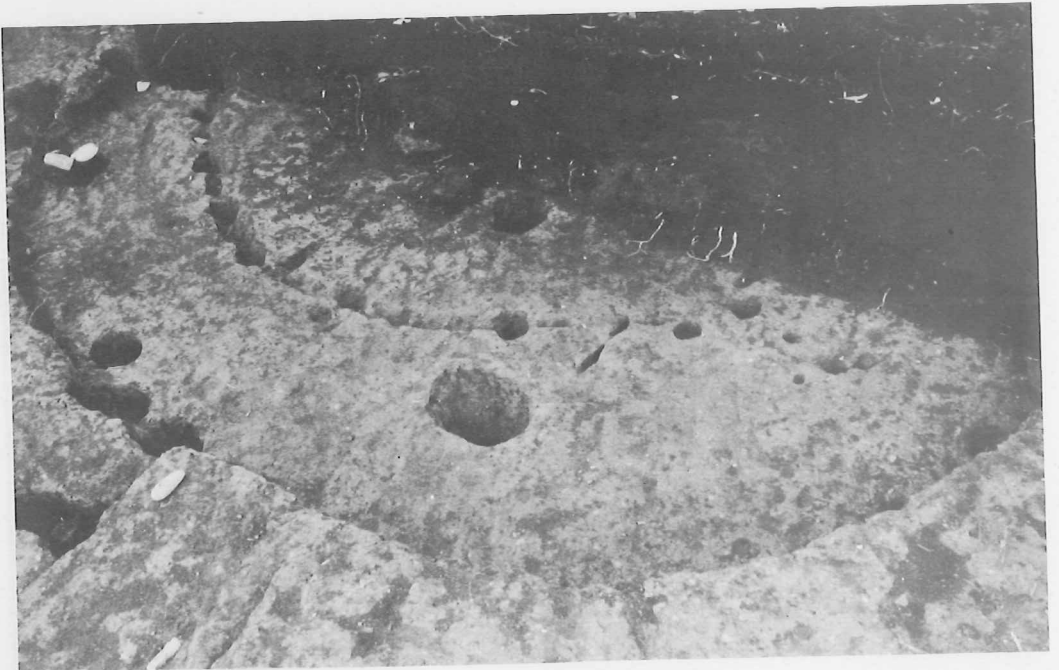
PL 3〔3〕 2号竖穴完掘状態



PL 3〔4〕 2号竖穴袋状ピット



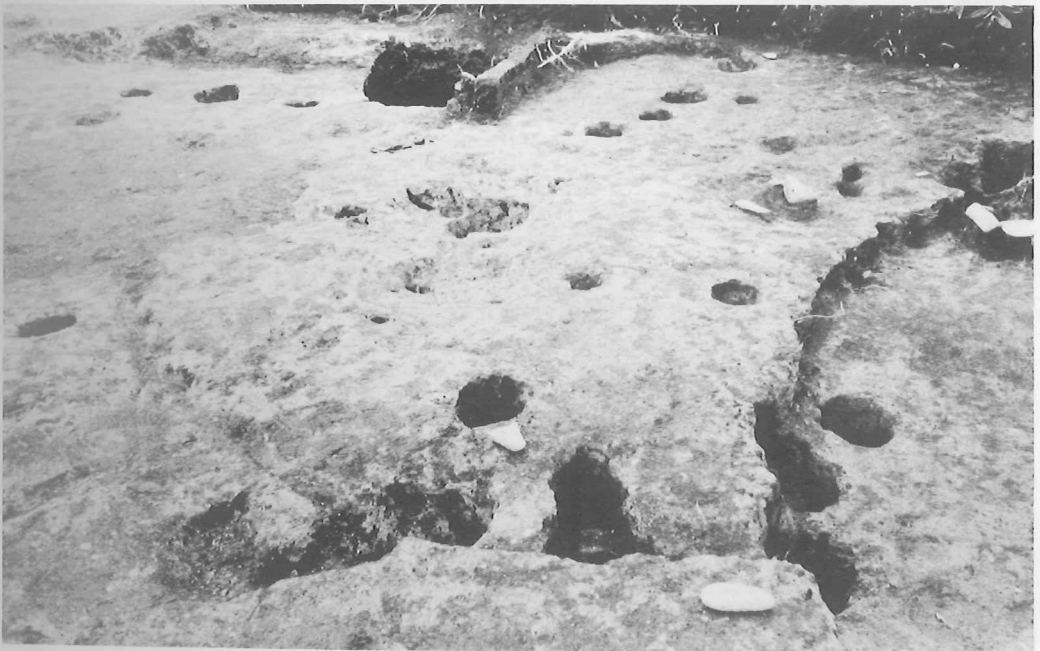
PL 4〔1〕 3・4号竖穴埋積状態



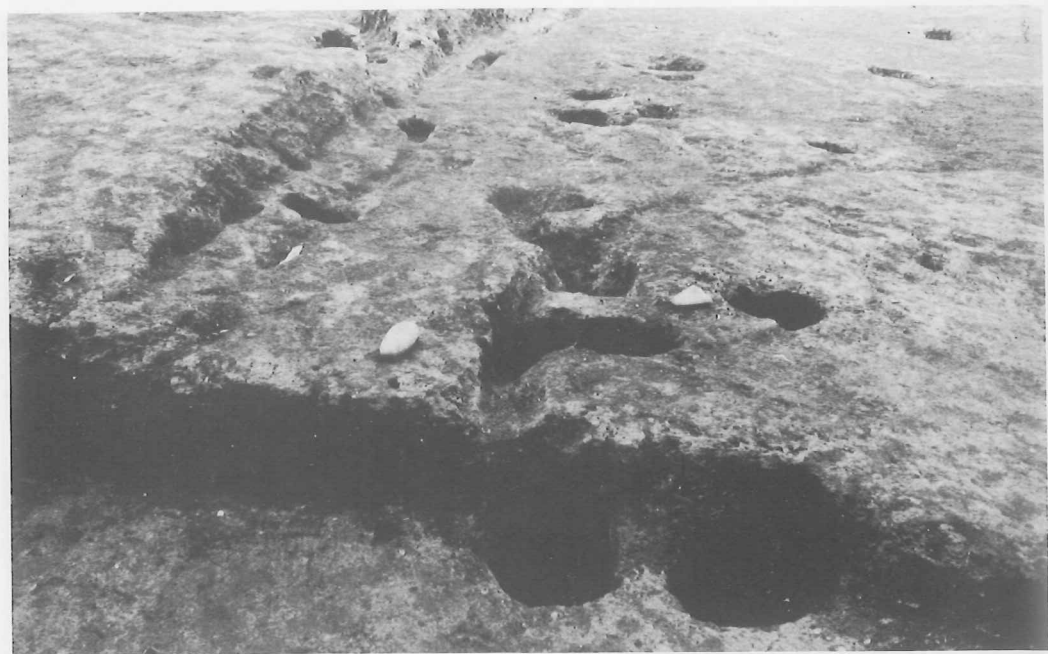
PL 4〔2〕 3・4号竖穴完掘状態



PL 5〔1〕 5号豎穴切り込み埋積土状態



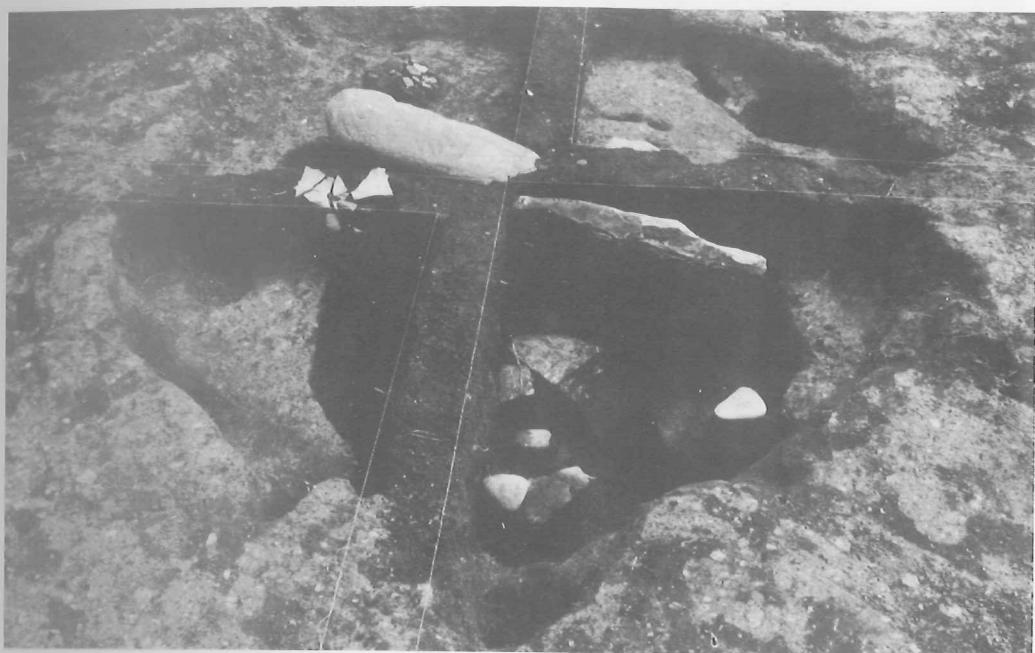
PL 5〔2〕 5号豎穴完掘状態



PL 6 1・4・5号竪穴切り合部分



PL 7 フラスコ状ビット写真



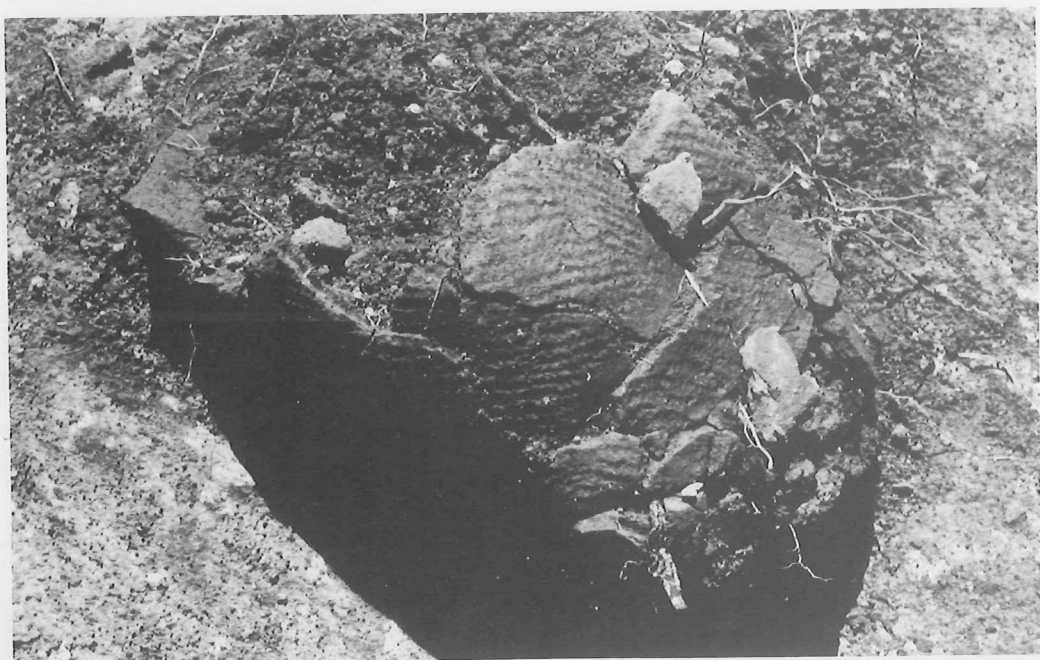
PL 8〔1〕 不整楕円形豎穴・土塚墓発掘状態



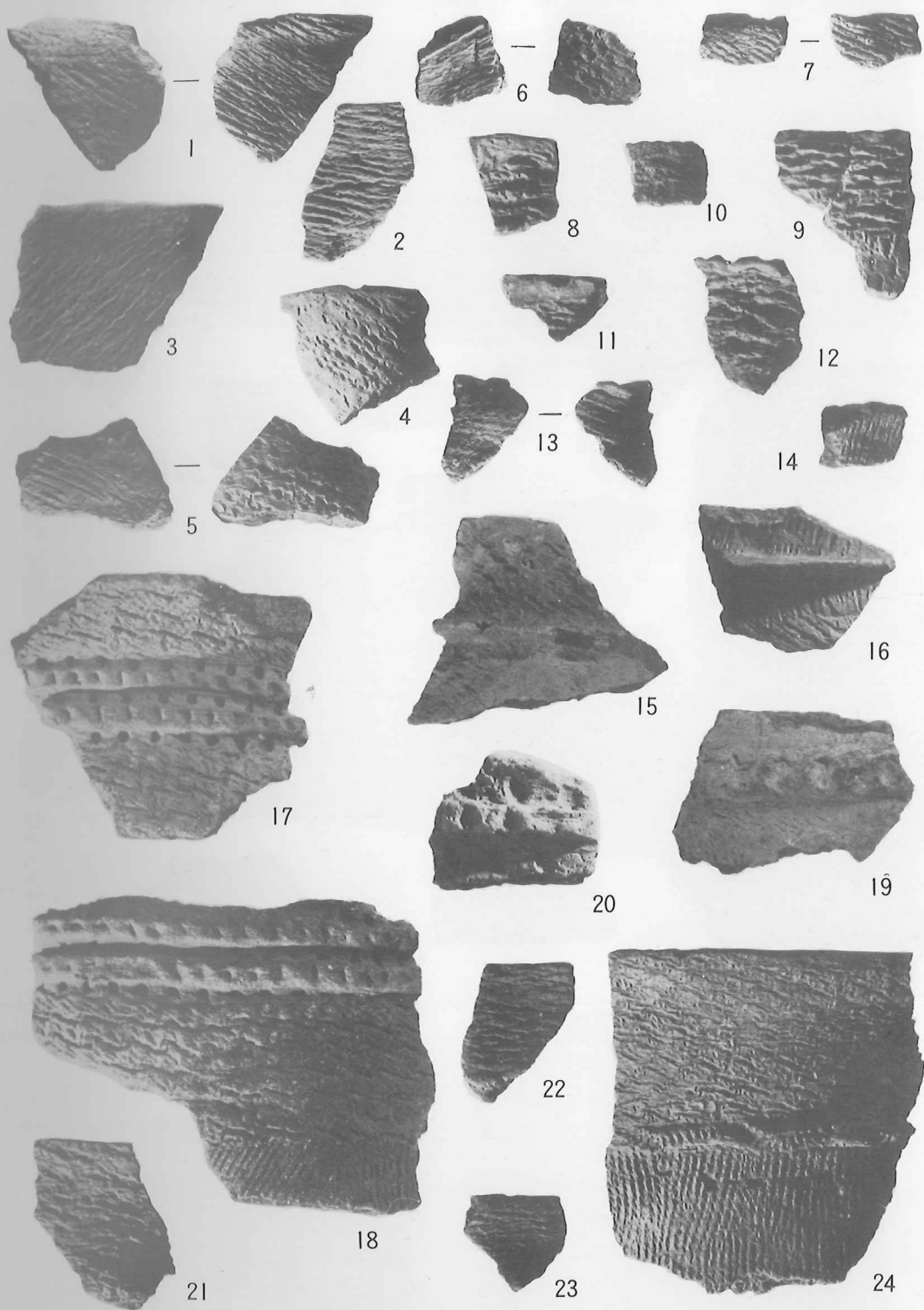
PL 8〔2〕 土塚墓細部写真



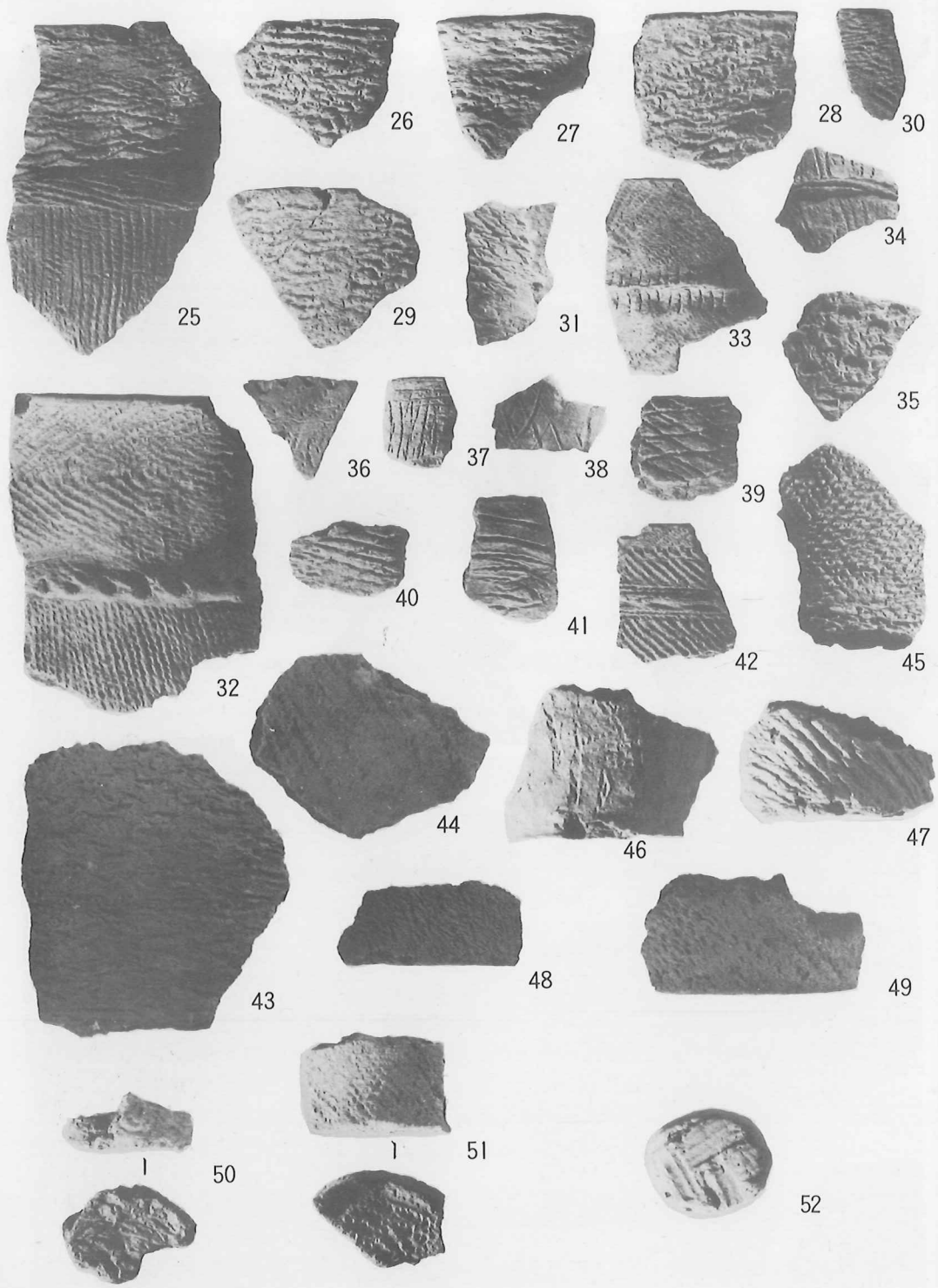
PL 8〔3〕 不整楕円形豎穴・土坑墓完掘状態



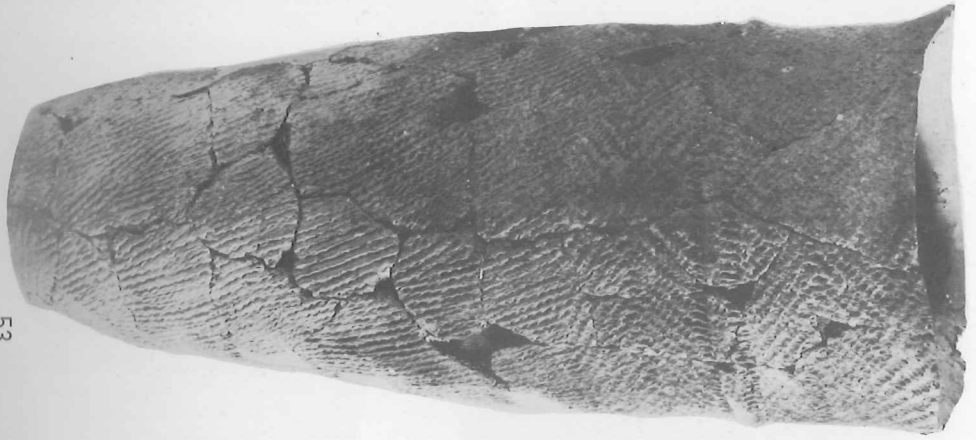
PL 8〔4〕 不整楕円形豎穴床面上出土土器



PL 9 (1) 2号竖穴埋積土中出土土器 (1/3大)



PL 9〔2〕 2号豎穴埋積土中出土土器 (1/3大・52は1/2大)



53



54



55

PL 10 2号竖穴埋積土中出土復原土器 (1/4大)



56



1

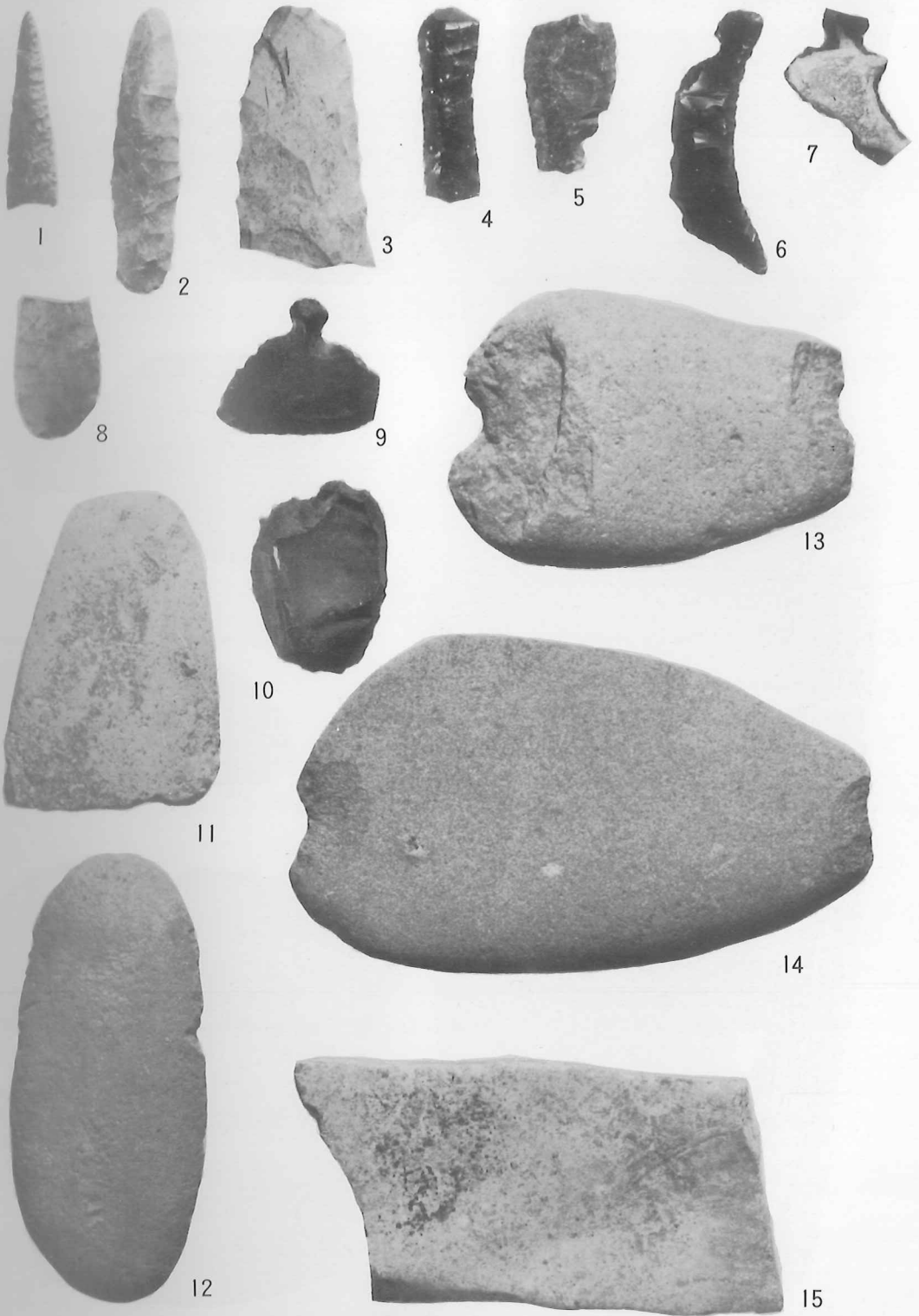


2



3

PL 11 不整楕円形豎穴床面上出土復原土器 (1/3大)



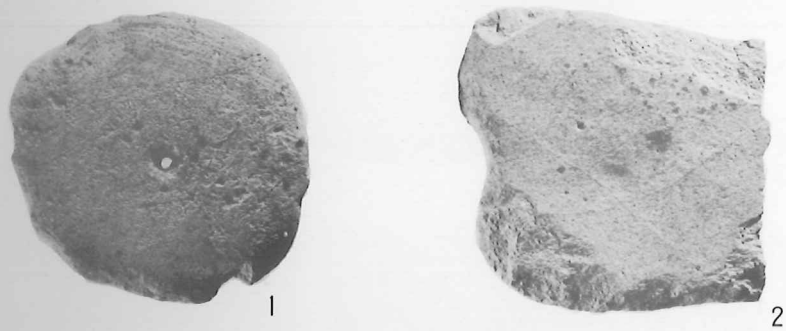
PL 12 2号竖穴埋積土中出土石器 (1/2大)



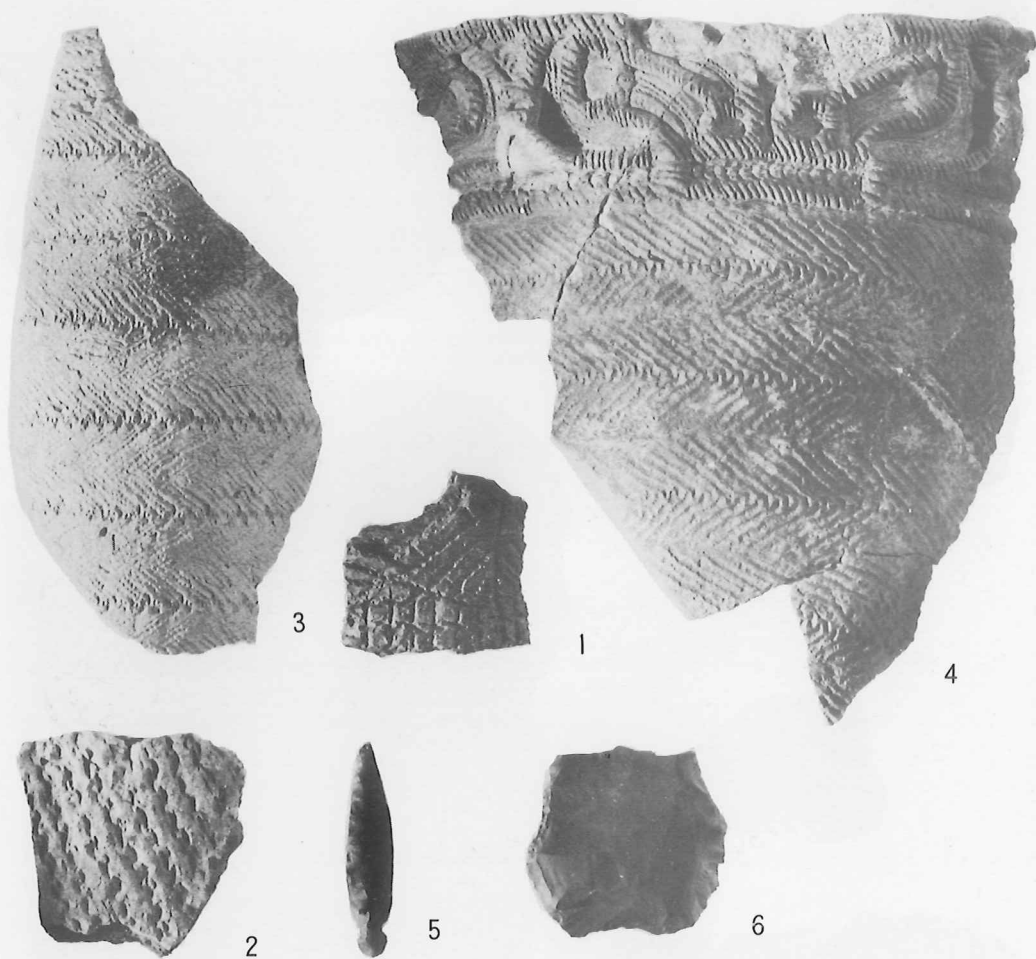
PL 13 4号竖穴埋積土中出土土器 (1/2大)



PL 14 4号竖穴埋積土中出土石器。(1/2大)



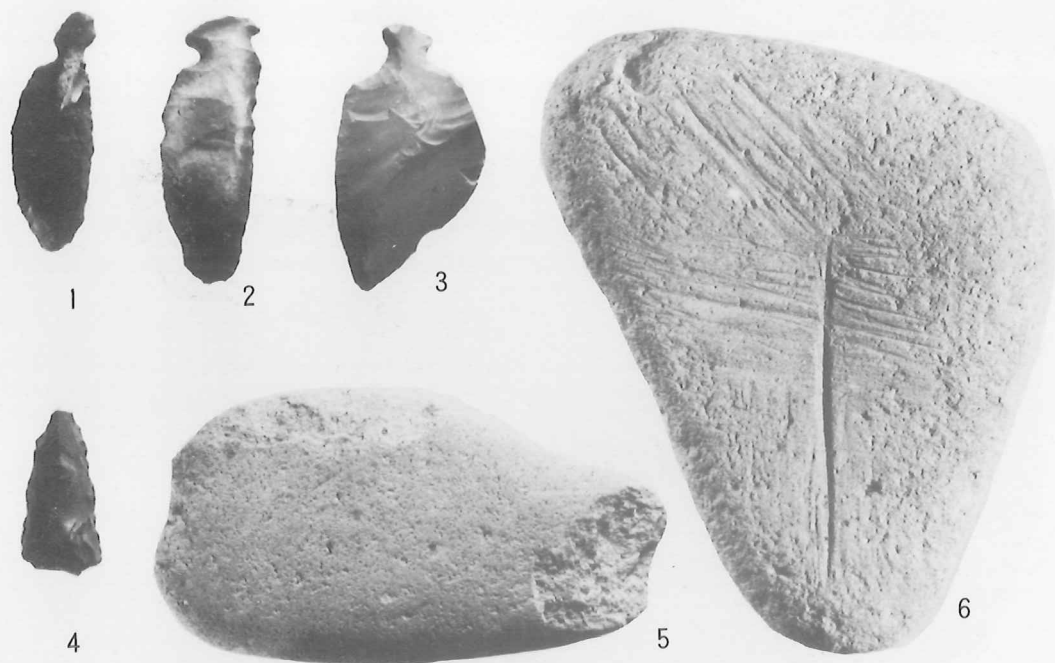
PL 15 5号竖穴床面上出土石器 (1/2大)



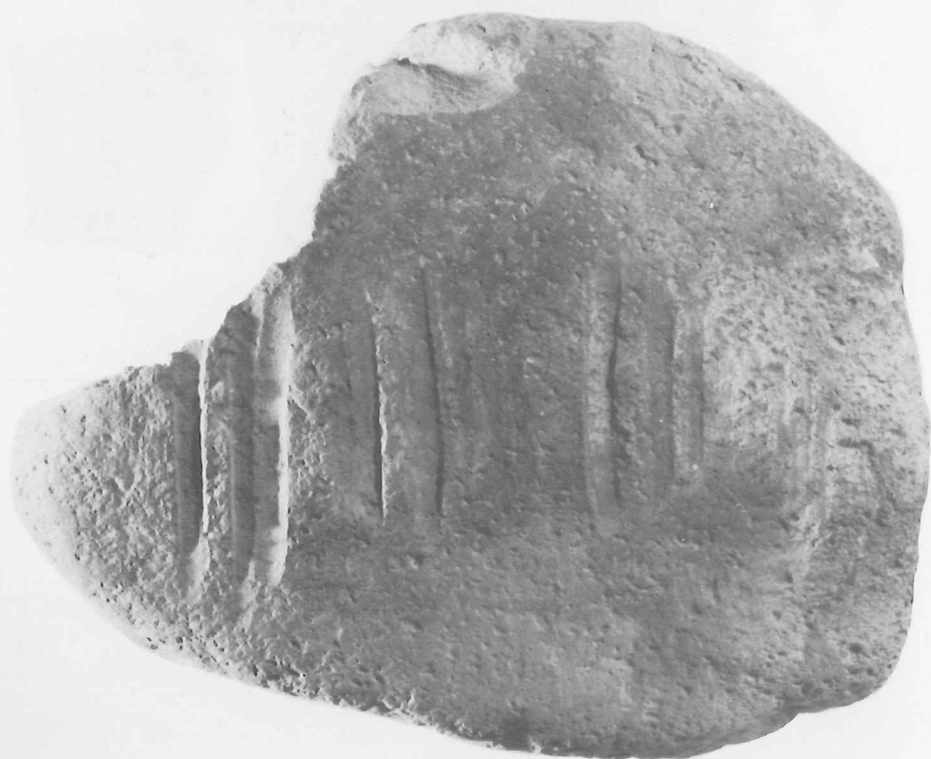
PL 16 フラスコ状ピット内出土遺物 (½大・4のみ⅓)



PL 17 土塚墓内出土復原土器 (1/3大)



PL 18 土塚墓内出土石器 (1/2大)



PL 19 台地下水田用水路傍発見石器 (1/2大)

大館市史編さん調査資料第15集

大館市山館「上ノ山遺跡」発掘調査報告書

1975・3

発刊 大館市三の丸 13-1

大館市史編さん委員会

印刷 (有)大館孔版社 大館市谷地町後